家庭雑誌
販賣所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勧工場
第五巻
明治四十年七月
本號要目
尼僧の犯罪……社
晩婚と婦人道徳……中尾清太郎
死骸に對して……有秋生
三年の庭……
繪はがき集……
最も進歩せる
家庭雑誌！

第五回內國勸業博覽會銅牌及褒賞狀受領

登錄商標

壽美禮おしろい

五二會品評會功勞銅牌

THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ウワイオレット煉製
錫蓋附乳白硝子器入
壽美禮おしろい



◉壽美禮おしろい◉

ねり製定價（大壜二十錢 小壜十二錢）水製定價（大壜 中 小）

ヴワイオレット水製

錫栓附乳白硝子壜入



すみれ白粉は　歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素新成蹟體等を以て配劑しあるを以て肌を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顏肌へを清々しく天然の色白きに至るべし菫『おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會、祝席、雜踏の塲所に臨て衛生上生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◉西洋洗滌劑壽美禮あらい粉の特性

●弊舖製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞賛する香料及弊店新製の原料を用ひて製せしものなれは朝夕此洗粉を御用ひ給へば能くあかを落し御肌を美しくなす

◉常に髮洗ひに用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生せず又半襟ハンカチーフ絹綿等に用ひて能く汚垢を落す總て物を染白する性あり

◉使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は温湯に溶し又はぬかに混せ入浴の際用ふるを良とす

綠、藍、紅彩蝶番ひ　大袋入　二錢
鑵詰　七錢五厘　袋入　壹錢

登錄商標

西洋色白くなるあらひ粉

SUMIRE.
Washing Powder
壽美禮あらい粉



製造本舖

東京東兩國
元町兩國橋際

壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工塲各劇塲運動塲に有り

米國現大統領ルーズベルト著本社譯

米國義勇軍實戰記 鐵騎隊

（本月上旬發行）
定價金三十五錢
郵稅金四錢
菊版、美本!!!
現代無上珍書!!!

▲口繪、義勇奮闘大寫眞版挿入!!!

米國現大統領は其未だ大統領の月桂冠を戴かざるに當り偶々米國と西班牙との間に干戈を交ふるの事あるや、大統領悲憤措く能はず義勇軍を米國の全土に募り自ら將として之に赴き、向ふ處は西班牙の領なるキユーバ群島なり率ゐる所の者は一騎當千の騎馬武者數千騎、縱横馳突、奮戰力鬪、山野に起臥するもの數十個月、竟に能く敵軍を降服せしめて凱歌を揚げ歸る、此書は即ち大統領が歸後直に筆を揮つて著せし所に係り、義勇軍奮鬪の狀、大統領が其間に驅騁奔走するの態、目前に其實際を睹るが如し大統領の竟に無上の榮位に登りしは、此大著述の影響與つて大なるものあり現代の男兒必ずや本書を一讀せざるべからず!!!

◉世界の既往大博覽會偉觀を一目に見るは此書!!!

大好評

世界近代 大博覽會寫眞帖

◉今春の東京博覽會偉觀を一目に見るも此書!!!

▲美麗無雙 菊版 舶來紙

定價金四十五錢
郵稅金四錢

本書は實に世界文明の精華たる既往世界大博覽會と本邦近代の博覽會及今春より開かれたる東京博覽會の偉觀壯觀を集めし美麗言ふばかりなき大寫眞帖也而して市俄古、巴里、聖路易等世界大博覽會の偉觀は皆此書中に滿載せらるゝと共に、京都、大坂の博覽會及今回の東京博覽會の偉觀も此書中に蒐集せられあり、故に今回の博覽會觀覽者は以て最好の土產と爲すべく觀覽せざる者も以て机上の珍と爲すに足る!!!

石井研堂著（福翁自傳にも勝りし此傳記を讀め!!!）

再版 大好評 又將に盡きんとす

自助的人物典型 中村正直傳

菊版上製頗美●紙數二百餘頁●定價金四拾錢●郵稅四錢

●卷頭大寫眞（中村正直先生大肖像。夜二時に認めたる先生自筆西國立志編原稿。先生の血判を押して誓ひし自筆座右之銘と先生の讀書室、先生邸宅と令夫人。英國留學生時代の先生と先生の經營する同人社總員等多數挿入!!! 見よ本書の眞價値!!!

◉國民新聞評 德富猪一郎君（東京だよりに於て）◉頃ろ「中村正直傳」なるもの世に出づ。吾人は此の小册子に於て、端なく此の醇儒的生活に接觸したるを愉快とし、且つ感謝す焉

◉東京朝日新聞評 本書は先生の實行せる忍耐獨立、勤勉、剛毅、誠實、慈愛等を叙述して遺憾なく一讀模範的君子人の德に化せしむる者あり浮薄淫靡の風一世本書の出でたるは精神界に一道の光明を與へたる者也

米光關月君著 初版忽ち賣切れ再版又將に盡きんとす!!!

再版 大好評!!!

探檢小說 短刀英雄

菊版頗美本
定價金三十五錢
郵稅四錢

卷頭には狒々蠻女を追ひ日本勇士其狒々を射擊する活人大寫眞挿入

◉東京朝日新聞（十一月十一日）長府の一青年が忽然感ずる所ありて、家寶の短刀と十二錢五厘の錢とを懷にして、海山萬里の間に幾多の冒險事業を試み、遂に南洋一酋長の女婿となりて、大貿易に從事する生涯を叙す、奇聞怪談中々に面白し、少年の讀物として壯志を養はしむるに足る

（第六版）

奮鬪的生活

米國大統領ルーズベルト君著
日本成功雜誌社譯
訂正第六版又將に盡きんとす

菊版美本
鮮明寫眞數葉挿入
正價金參拾五錢
郵稅金六錢

◉本書久敷品切れの處社會の要求に依り第六版發行!!! !!!

雜誌『成功』『探檢世界』發行所

東京本郷弓町一丁目
振替貯金二二二〇九番

成功雜誌社

賣捌全國各書店



家庭雜誌

第五巻　第九號

人知れぬ努力

おほよそ世の事の、すら／＼と何の力も要らずに思ふ所まで行つて了ふと、人は此上もなく嬉しい感じがするものだ。けれども亦努力にも中々の趣きがある。九段の坂あたり、父は梶棒に母は車後に、そして兒は荷物の上に滿身の力を籠めてエイヤと計り玉なす汗の、見よ、流れては美はしき家庭の泉となるのだ。

雨が降る。小徑を横ぎつて小さな川が出來る。蟻の住家の大洪水、直徑三分ばかりの巖が押流されて行く實に悠々たるは水の努力なるかな。

たつた二株の庭のジャガ芋に花が咲いた。根の土を掘つて見たら、必と人知れぬ天地の努力を發見するだらう。

社説

○尼僧の犯罪

一

過ぐる日、金澤市に於て、私生の兒を擧げたる一人の年若き尼僧が、其處置に困じて、無情にも頑是なき赤子を用水堀に投棄し。依りて警察署に拘引せられたる一事件あり。世の新聞紙、相傳へて『恐ろしき尼』なりとす。然り實に恐ろしき尼なり。然れども是の一事實は『恐ろしき』以外、果して何事をも語らざる乎。

二

試みに請ふ吾人をして彼の尼の身の上に就いて少しく考ふる所あらしめよ。聞く、彼の尼僧年甫めて十九と。あゝ十九、これ女子青春の血あつく燃えて、人はづかしく、木の葉の散るも尚ほ可笑しき時代にあらずや。而も彼の女、其の艶やかなる軀を抱いて、空しく黑衣の裡に其の花の生涯を沒し去らんとするものは何ぞや。思ふに其間慘風吹き悲雨むせぶ底の事あらざるべからず。

かくありと信せよ――彼の女の父は由緒ある旗本武士の裔なりき。其の母と婚せる時は、幕府の威信地に落ちて、世は革命の風むごたらしうも荒びつゝ、祖父なる人は敢えなくも鳥羽伏見の變に生命を落し、祖母なる人は、そを苦に病みて、間もなく黃泉の客となりつ。若きよすがなき父と母とは、玆にあぢきなき世の心を味ひつゝ商に歸して、少しばか

りの公債證書を力に、細き生計の烟を片田舍、人稀なるあたりに揚ぐるなりしが、士族の商法は失敗するが常、程もなく資本の大部分をば失ひて、父は自棄酒に健康を損じ、母は身上の苦勞に窶れを見せて、娘が七つの年には、ふと風を引けるが基にて重き病の床に臥し、果は半身不隨の中風といふなる病に罹りて、三歳を起臥も儘ならず過しつゝ、秋風たつある日、脆くも彼の世の人となりしぞ悲しき。唯一人なりし娘の兄なる人、母の死に會ひてより、さしもに優しかりし心の如何にして狂ひそめけん。それよりは家に居る日もいと稀にて、惡所通ひを日課の如く心得ぬれば、さらでだに不如意の家計は、今は細き烟り一つだに立て兼ね

て、次第に弱りゆく父の健康、今は仕事さへも得せずなりにける。擣てゝ加へて悲しきは或日、ふと新聞紙上に無慘の轢死とあるを、胸とゞろかしつゝ讀みもて行けば、是なん二日三日、家に歸らでありし兄の最後ならんとは。父は狂氣の如く叫びぬ。妹は天地も漂へと泣きぬ。かくて浮世の冷酷を思ふが儘に味ひぬる父は、漸く御佛の法に歸依して、宿世の惡業を消滅せばやと、今は唯親一人子一人の娘をば寺に捧げて、其日の夕ぐれの風のふくまゝ、己れは御寺の鐘樓の軒に縊れて、終りなき世の終りを告げつ。それよりして玆に八年を、娘はありて甲斐なき身も佛の爲めと生存へて、朝な夕な唯看經の外なきなりき。

三

尼の身の上かくもあらば更に憐れは深かるべし――情けに餘りし兩親の、蝶よ花と愛でし嬢の、行末幸多かれと思ひおきて、玆に百歳を契るべき似合はしの良人を、幼な友達に選べるなりき。娘も、其の男の子も、やうやくに物心つくにつけて、親のなさけ染々と身に泌みつゝ、戀しと思ふ心さへ、早くも二つの胸に充ちぬれば、やがて業成るの日は樂しき事の數を盡さばと、思ふ數々の事、徒し夢となりて、春風まだ花を訪れぬ去年の暮、うたてや我が思ふ人は、北邙一片の烟りと化して、世は永久に光りを失ひつ。此時よりぞ此寺に、年若き少女の惜氣もなう黑髮切り下ろしたるが殖えきといふ。

四

俗なりし折の彼の女が悲しき歴史は、兎にも角にも吾人の涙に値ひすべきもの必ずやあるべき也。あらば美くしかるべき綠髮を切り下ろして佛三昧に日を送れる尼の、更に、法衣の袖にあまる十月の腹を抱へたる心の中を思ひ見よ。泣かであるか君、吾人面を擧ぐるには餘りに人情を解したり。

彼の女、父母の罪障を除かんとして尼となりしか。將た戀人の運命に泣きて佛門に歸せしか。われ得て之を知らず。されど尼僧は是れ佛法の奴なり。非獸性なる筈なり。非性慾なるべき筈なり。而も倘ほ事姙娠に至る。彼の女は如何に恐れしぞ。如何に苦しみぞ。此の恐れと苦しみと

の必然來るべき冒險を敢てせざる能はざる彼の女の胸中の矛盾、それ果して誰か之を知るものぞ。

五

尼僧の懷姙、今の世に於ては、本人にとりては恐怖と失望なり。世間にありては嘲笑と迫害なり。彼の女が此の痛苦より逃れんと欲して、其の愛兒を棄てたるは、實に戰慄すべき罪惡なりと雖も、あゝ彼女は此の途に出でずして、よく彼女自身を救ふべきの方法を知らざりしなり。彼女若し兒を棄てずんば、自己を棄つべきのみ。かくて彼女は自己の身命が嬰兒のそれよりも貴きを思ひたりけん。

六

『恐ろしき尼』なり。實に恐ろしき尼僧なり。其の產みたる嬰兒を慘たらしくも溝に投じて、人知るまじと思ひたりし恐ろしくも亦淺ましき尼よ。されど吾人は御身を鞭つと能はず。

御身は手して其可愛き子の絆を斷てり。されど开は御身の所業に非ず、慘酷なる世、無情なる社會、冷酷なる道德、御身を強いて此の罪を犯さしめしのみ。

十九は人の春にあらずや。御身の目には希望の光りあり。御身の頰には紅ゐの血潮燃ゆる。麗はしき眉よ。ふくよかなる手よ。珠數つまぐるには餘りに若きに過ぎたらずや。而も人の世の情なき掟、すべての光りと色とを緇衣の下に滅却して生きながら花の春を死せよと願ふ。あゝ我は

御身をして玆に至らしめし世に恨みなき能はざる也。

七

恐ろしき世よ。吾人は過ぐる日の新聞紙に記せる一文を揭げて此の記事を終らんと欲す。

＊　＊　＊　＊

霧充ちる穹窿のもと、蔭暗き圓頂閣の懷、重々しき祭壇、巨刹の如く高く幽暗の中に頭を擡げ、白色の十字架、鐵鎖によりて凄冥の間に掛れる下、一樣の服裝せる聖童女の、跪まづきて號哭せるは、纖弱なる婦女子の靈と肉とを殘害せる歐洲中世の精舍なりしが、今の世尙ほ悲慘なる淨樂界あるこそ痛ましけれ。東京の片邊り、青山北町に信州善光寺の出張所あり、住職八幡清觀尼（三十）の外

十六歳より二十五歳までの、還俗の身ならましかば漸うあげ初めし前髪の色美はしかるべき、尼僧五人ありて、男氣とては僅かに執事を勤むる田島小藤太（八十七）と云へる老人のみ。維新前には將軍家よりの御朱印つきといふ、宮家より姫君の住寺となり玉ひて、其下に數十人の尼僧あり、境内の如きも七千五百坪もありて頗る巾を利かしたるものなりしが、春風秋雨幾雪霜、今は仁王門や本堂に漸く昔の俤を偲ばしむるのみ。此寺に仕へる前記六名の尼僧は每朝必ず五時に起き出で、一人は住職と共に讀經を爲し、二人は本堂庫裡等を凡て掃除し、他の二人は遠く小石川傳通院前なる淨土宗比丘尼學校尼衆校に通學し居れり。只管に御佛の袖に縋れる彼等も、流石に街上などにて侮辱嘲弄の言を聞く時は、頑是なき少女の事とて、泣き歸る事も屢々なりとぞ。

* * * *

あゝ吾人は何時までか、沒人情、沒人倫の「尼僧」てふものを有せざるべからざるぞ。世人よ、尼僧の結婚と生殖とを否むの道德は既に業に金澤市の用水堀の畔、うら若き一比丘が涙と血との行爲によりて破られ了れるぞ。乞ふ諸君と吾人と、此の古き道德を棄つること弊履の如くならん事を。



○晩婚と婦人道德の變改

中尾濟太郎

新宿青山あたり、無制限に膨脹したる市街の、新に耕地を潰して礎を置き屋を構ふるものは、多く是れ佩劔鏘々の人にあらずや。若し一日閑を偸んで此あたりに徜徉するとき、其日偶々日曜にあたり、其時偶々晩風軟かに吹いて膚に宜しくば、平生佩劔の人、即ち寛衣緩帶の人となりて、御當人の年にも耻ぢぬ隨分うら若き庇髪の君を伴うて、徐ろに歩を移したまふに出で逢ふべし。余は先づ彼等の出現に眼を瞪らされ、やがて其對照に彼等將來の悲痛を想像して、坐ろに悚然たらざる能はざ

る也。將來の悲痛とは何ぞ。年齡の懸隔より來たる種々なる破綻、主としては早き死別なりとす。彼等の間には、四十、五十にして二十歳未滿、いかに長けたりとも二十五歳を過ぎざる婦人を迎ふるを以つて珍奇なる事實とせず。これ一面皮相に於いて、賤劣なる美觀に價する對照の美を成せるなるべしと雖も、然も一たび心を潜めて彼等二人の年齡の懸隔より來たる現在家庭に於ける調和のほどを想ひ、更に將來——然り、餘り長からぬ將來——死より來たる所の不可抗的不幸を揣摩し、誰かは涙なくして已まむや。

ミルトン三十五歳なるとき十七歳の少女を娶る。彼女常に一子を抱いて告けて曰く、『御身こそ わが 友なれ。彼はわれと御身との差よりも甚しく年高ければ。』と、彼とは其夫ミルトンなりき。不幸なる家庭は遂に鸞離鳳別の悲劇を免かるゝ能はざりし也。

更に近世の醫家は説いて曰く、高齡者の結婚は神經質の子を產むと。こは配偶者双方の高齡なる塲合に云へるものなれど、單に年齡の懸隔が羸弱なる子を產むも、亦掩ふべからざる事實なりとす。世は益々競爭の激烈を加へ、之に投ずるものは漸く病弱ならむとす。最早、個人の不幸悲痛にあらずして、寧ろ人類の不幸悲痛にあらずや。

然も斯くの如きの結婚は、今日の社會狀態に在りて、最も避け難き所なりとすれば、吾等は爰に一般人の懷抱せる舊來の婦人道德の變改を主張せざるべからざるものあり。舊來の婦人道德とは何ぞ。再婚に對する非難是れなり。此非難の聲は、日清日露の戰役を過ぎて、特に軍人の間に盛んなるが如し。これ吾等に取りては決して新しき問題にあらざれども、姑らく彼等及び一般人の爲に言ふべし。

今や生活の困難は祖先傳來の財產を襲得せるもの丶外、何人も覺悟せざるべからざる所にして、其彼等の一家を經營するや、なか〳〵容易のわざにあらざるなり。是に於いて晩婚は避け難き事情となれり。且つ本邦の俗、道德と相待ちて婦人の初婚を冀へば、一家經營の衝にあたる主人の老壯なるに比して、之に配せら

る、ものは甚しく弱少に過ぐるの奇觀を呈するに至る。亦已むなき所とすべし。而して一旦夫の死に會せば、妙齡の夫人は忽ちいたはしき寡婦となる也。此場合、强ひて舊來の道德を支持して、妙齡の寡婦をして終生孤獨に泣かしめむとす。寧ろ慘忍にして、人情を矯飾するの甚しきものにあらざるか。成る程今日夫を亡うて涙痕未だ褪せざるに、明日既に良緣を求めて再嫁し去るが如きは、一時の感情上不快なるは勿論、本人とても自ら少しく咎むるものあるべし。されど彼女をして終生再婚の機會を失はしめて、十年、二十年、三十年。煢々たる寡居に懊惱せしめ、屢々躓蹶の危殆に瀕えしむるに比して、人生の幸、個人の救、孰れかより多く全うせられたるや。廣き世の中には阿部磯雄氏の如きありて、余は妻を亡はゞ必ず餘生を獨身にて終はるべしと公言せる人もあれば、女子をして亡夫に對する操を立てしむるも大不可なかるべしと雖も、我邦の結婚には隨分無理なる妥協を爲して、辛つと結び付けたるものもあり。或は夫婦となりても愛情甚だ冷やかなるものもあり。斯くて死別して數年、去る者は日に疎しの譬に漏れで、人間本能の要求は新なる戀に醉はむと願ひ、性慾の發展に動き、ホームの甘味に夢あらたに、男女雙棲の固有性に心ときめき、或は事業の爲に、活動の爲に、或は言を大にすれば人類幸福の爲に、社會進歩の爲に、二度の夫を求むるものあるべし。是れ豈に妨ぐべきものならむや。彼等が再婚するに些の不可なき也。

既に余が例外とせし如く一旦夫に別れたらば貞女道の文句通り、舅姑に仕へ、夫の忘れ形見あるものは之を守りつゝ、いつまでも昔の戀を戀うて寡居するも、本人自ら欲する所ならば、是れ亦深く咎めざるべし。斯くの如き婦人あること、亦人生の刺擊なるべし。或場合には誇なるべし。されど何人も婦人は皆斯くあらざるべからずと强ひる者あらば、そは苛酷なり。無道理なり、所謂『軍人の未亡人』の末路、婦人道德の變改を要求して已まざる實證にあらずや。余一日、堺君、大杉君を柏木の郊外に訪うて、此文を作る。

○死骸に對して

有秋生

（一）

余は無神論者である、固より未來を信ずることは出來ぬ。余は無政府主義者である、嗤笑ふ可き宗教家の靈界に於ける『神の王國』をも否定する。死の彼方に侚國ありや、余は其處まで迷信を逞ましふせぬ。現世は現世で足りである。

妹よ、昨日まで微笑みし妹よ、余は御身の靈魂に就て信ずるものでない。御身は今、一塊の肉と、一束の骨に依て聯がれたる一個の死骸として余の前に横はつて居る。余は唯だ御身を土塊の如き死骸として見る。忌む可く、恐る可き病に依つて、生を耗盡せる、唯だ一個の死骸の上にも倘ほ兄弟の愛を繋ぐものではない。今や御身は余の妹にもあらず、骨肉でもない、唯だ血である、筋である、肉である、骨である。

愚なる人は、御身の死骸を葬むつて、御身の墓上に花を典ずるかも知れぬ。然し斯の如き習慣的感情に依て繋れたる虚儀と虚式が、御身に拂はれたる何れだけの榮譽ぞ。

（二）

死は人生の最後である、是を宗教家が言ふ人間復活の初頭でもなければ、罪の價として得た酬でもない、御身が二十五年の長きを、貧苦と、悲嘆と勞働に困鬪して得た當然の結果である。御身の精力は盡た、御身の活力は枯た、御身の花顏は褪た、呼吸は迫り、體溫は降下し、精神は昏迷に陷り、心臟は皷動を止た、初て其處に死がある、死は不思議ではない、死は當然の結果だ。

一日勞せば、一日活力は減ずる、一日苦しめば、一日血は涸る。其他戀愛し、生殖し、尠からず人間の精力は消耗する、而して、最後に到るものは死である。

（三）

『死』と云ふと語弊がある。『人間活力の終局』と云つたら好からふ。妹よ、御身は其終局に入つて、資本家の暴横から免がれた、紳士閥の鞭笞から逃れた、有ゆる繋累から脫した、而して今、目出度く永遠の滅亡に入つた、見る可き苦痛も無く、聽く可き悲鳴もない。咯く可き胸の血もな

けれは、流す可き悲嘆の涙もない。土より出て土に歸る、御身は幸福の絶頂にある。

あゝ、昨日まで妹たりし死骸よ、今穴に逝け、暗く冷たき穴に逝け、其處には唯だ大なる虛無の影あるのみである。

あゝ昨日まで愛でし死骸よ、今土に還れ、今花の肥料となれ。來ん春の朝、其土より咲出でし菫を、せめては御身の俤とも見て、余は薄幸なりし婦人の一生を哭くであらう。



○三坪の庭

木生

たつた三坪の庭、降り立てば降り立つたぎりで動く事も出來ない樣に狹い庭だけれど、それでも終日賣場にばかり坐つて、青い物と云つては屋根の草より外に見る事の出來ない自分等に取つては、實に天の樂園―エデンの園とやらに逍遙する樣な氣がするのである。

殊に下町の夏、堪へ切れぬ午後の二時頃などは、多くもあらぬお客樣の待遇に汗みづくになつた身體を、水道の下で洗つて、此の庭

へ來ると何とも云へぬ心持がして、生き還つた樣に思はれる。

強い日の光りを受けた青葉は、透き通る樣な鮮かな色を見せて、涼しさうにそよ吹く風に動いて居る。鉢植の銀杏は、尺ばかりなのが七本、小さな白い鉢の、青苔の土の上に青葉の木蔭を作つて。是が自分等の逍遙の深林である。身を寸ばかりに思ひなして、この森かげに逍ひ歌ふと青葉のひま洩る日の光りが、青く白く肩に膝に落ちて、草の匂ひ、花の香り、谷かげに清水の落ちる音もする樣な氣がして、得も言はれず懷かしい。

去年の夏、皆なが更る〳〵に手を下して作らえた泉水も、水垢に、もう如何にかセメントの色の隱れて、新着の金魚、目高などが、水管仕掛の瀧水の下に、たつた一尺五寸の間を我等が世界とばかり、樂しげに勢ひよく泳ぎ廻つて居る。

泉水の上の築山、三尺ばかりの場所へ土を盛つて、緣日から買ひ集めて來た五寸位ゐの樫、欅、松、檜葉などを植え散らして、そこに瀨戸燒のいゝばら家などを据えた築山、こんな山の中にも、もう現代文明の大波が推し寄せて來たと見えて、木の蔭、石の上などに木綿糸の電線が縱橫に張られて、葭を束ねた橋の上の、釣する人の傍には、郵便脚夫が忙しさうに馳け歩いて居る。

築山の右が青木の五尺ばかりの大木で、その後ろの日の當らぬ處にヒヨロ〳〵と小指程の太さの柚の木が二本ある。同じ時に植えたのだが、左の方は幾干か日が當るので三分の一程高く育つて居る。どれも之も一樣に日向の方へ頭を曲げて居るのを見ると、自分も同じ憂への、年中家の中にばかり居て表へ出られないことを思うて、日の光り戀しさに心も燃え立つ。

青木の傍に、青木と丈を爭つて此の狹い庭を我物顏に睨んで居るのが石燈籠である。毎日米揚笊を干すので十粒ばかり落ち散つて居る米粒も、石燈籠の上にあると、何處からか鳩が飛んで來さうに想はれて、面白い景色に見える。石燈籠は元本宅の庭にあつたものだが、同じ樣なのが二つあるので、一つを貰ふ事にして、折柄仕事に來て居た植木屋さんに賴んで此店の庭に運んだものである。そのお蔭で、狹い庭が一層狹くはなつたが然し大分引立つて見えるやうになつた。暑苦しい晚などに、水を打つて灯を入れると急に涼しい風が吹いて來る。椽側に筵を敷いて臥ころげながら鹽せんべいなどを嚙つて高談放語するのが、何よりの樂しみである。

石燈籠と水鉢との間に、葉蘭が一株。それが十年一日の如く殖えもせず減りもせず、伸びもせず縮みもせず、まるで生なきが如くに又死なきが如くに繁つて居る。

左の方には物干へ上る階段があつて、椽側の傍の置石から其の上り口までに飛石が三つ置いてある。これは一昨年の夏、自分とモ一人の友とで矢張本宅の奥の空地から運んで來て手造えに造えたものだが、それももう大分青苔が生えて、ちよつと見ると名ある庭作りが丹精をこらして置いたかの樣に趣きのあるものとなつて居る。

この外に、梅と櫻と藤と紅葉と、それにモ少し經つと、早起の遠乘連が午前八時頃に入谷から蚊に食はれて歸つて來てお土産が晝過には配達になる其の朝顏の大輪と、朝寢坊の夜ふかし自分の如き連中がお湯の歸りに緣日へツッと廻つて買つて戻る鳳仙華に松葉牡丹などを交へて、鉢植の數が大凡十鉢位ゐはある。櫻は番頭さんが自宅から持つて來て店へ呉れたものだが、ちよつと古木の形をして居て、花は咲かないけれど枝の枝垂れ工合が佳いので、誰やらの寄附の金二錢の、石油でつけるアーク燈を灯すと、まるで繪にある祇園の夜櫻を見るやうだ。

こんな狹い庭にも猶、池に泳ぐ金魚、枝に下る蜘蛛と倶に、地に這ふ蟻が居るから嬉しいではないか。庭の東南に當る一番隅の處で、椽の下に近い、雨のあたらぬ場所に蟻は其の本城を構へて居る。天氣のよい日には總勢四五十疋が總出でそこいらと食物をあさり歩いて居る。鹽煎餅の破片、氷砂糖の屑、飯粒のこぼれ、金鍔の竹の皮なんどが絕えず椽側から掃き下されては其の食糧を給して居る。夏の晝休みに、寢ぼけ眼をこすりながら、椽側から其の運動を眺めて居ると實に目ざましいものである。青苔の花園、雨垂の池、そのあたりは一面の戰場で、大きい小さい幾何づゝかの獲物を抱へた各戰士は野を踏み山を越えて頻りに其の本城へと運んで居る。少し大きな物で一人の力に及ばぬ時は、發見者が大急ぎで之を其の友に通告する。すると忽ちに十數人の同勢が集つて來て、エイ〱と聲を出さんばかりに勇ましい姿をして引いて行く、協力一致、それが彼等の主義であるらしい。定めて一族和合した平和な樂しい家庭を作つて居るのだらう。と思ふと自分の樣に未だ家庭に歸る事の出來ないものは、却つて蟻の方が羨ましくも思はれる。煩悶、不平、爭奪、そんな事は恐らく蟻の世界には無い事であらう。

書いて茲に至ると。自分は限りなき悲痛を覺えるのだ。こんな樂しい庭園も、この夏を限りにもう永遠に別れねばならぬのだ。再び見る事が出來ないのである。あゝ市區改正！

あゝ市區改正！大厦高樓軒を並べて大道砥の如く磨き出された市區改正後の町は、電燈輝き柳しずれて嘸美しいものであらうけれど、我等はその爲に此の美くしき庭園、自分等が夏期に於ける唯一の生命と賴んで居る此の樂しい庭園を奪はれるのではないか。

市區改正の爲の新らしき普請はもう始まつて居る。その普請場とこの庭との間を畫して居るトタン塀は掠奪軍の先驅では無いか。手斧の音も一擊、一擊、に此の庭園の生命を刻むが如くに聞えて來る。

自分が新らしき家の設計圖を見た時、第一に求めたのが此の庭であつた。ところが其の圖には此の庭が無かつたのである。自分は失望と不平とに心も激するやうに覺えて、せめて一坪でも二坪でも善いからと、强いて其の設置を望んだのであつたが時代の要求は遂に此の切なる望みをも情なく斥けて了つた。あゝ三階の家、五間の玻璃窓、十數疊の賣場、階上の陳列、休憩室の設置、店頭の美々しく廣くなるに連れて、病室、臺所、庭、我等の領分が段々小さくなるでは無いか。

氣を附けて見ると、藏を崩した砂ほこりは塀越に飛んで來て、草木も白く見える程に積つて居る。鉢植の土も乾きに乾いて、それに洗ひざらしの寢衣の物干から落ちて掛つたのが、氣のせいか洪水の跡のやうに見える。あゝ荒廢！自分は辛さと心細さに暫らく茫然として此の庭に佇んで居たのである。

三越の屋上に空中庭園が出來、某伯の邸宅に玻璃葺の大花壇が出來るの時代は、即ち我等雇人が、その夕ッタ三坪の庭園さへも奪はれて、ただ阿鼻たゞ叫喚、忙しく味氣なき物質文明のランビキ機械の中にその生涯を送るの時代である。

○情慾教育

▲歐洲敎育界の新題目　獨逸を中心として、瑞西、丁抹、瑞典、諾威等の諸國に、『情慾敎育』といふ問題が此頃大分やかましくなつてゐる。ちよつと其内容を紹介しやう。

▲無知の弊　古來歐洲でも日本同樣生殖などについての事は公言すべからざるものとして、一切息子や息女に知らしめなかつた。小供が『母ちやん赤ん坊はどうして生まれるの』と聞くと、母親は『鶴が來てね、そ

ーッと煙突の上から投げ込んで行くんだよ。』などゝ教へてゐる。そして學校で聖書を教へる時などにも、情慾に關する部分は除けておくと云ふ工合なので、子弟は情慾に關する知識が全く無い。そこで不幸にも却つて不潔な病氣に罹つたり、手淫の爲に身體を弱くしたりする。この容易ならぬ弊害を心ある教育家がどうして見免がせやう。

▲教育家の主張　そこで有力な教育家たちの内に此ういふ說が起つた。學校及び家庭に於ては、卑猥ならざる範圍に於て此等の知識と訓戒とを子弟に與へねばならぬ。そして道德上衛生上の危害を豫防するのが、吾々の正當にして親切なる務めであると。

▲謂はゆる情慾教育　此の如き事情の下に、目下伯林大學を始めとし、ジュッセルドルフ、ドレスデン等の獨逸各中學校では、學校醫をして、情慾より生ずる諸種の弊害、生殖の道理などを說明せしめて、生徒に情慾の意義を悟らせ且つ自衛心を起すやう仕向けてゐる。又道德上よりする訓戒も各校の怠らぬ所であるといふ。

▲制慾　かくて又一方には頻りに制慾を獎勵し、同時に肉體的にも成るべく春情誘發の要素を少なくさせる爲め、鳥毛の蒲團、不潔な下着、狹い着物、不適當な煖温法即ち懷爐炬燵等を用ひさせず、カクシの中へ兩手を長く入れておく事や、女子が長時間正座する事を禁じ、冷水摩擦を獎勵し、學校の寄宿舍は成るたけ深林の中へ建てるといふ風に注意してゐる。

▲男女共學　ところが茲に悲慘なのは男女生徒共學制である。歐洲の教育界では今や此問題は贊否相半ばしてゐるが、贊成派の言ふ所によると、彼等は共學といふ事によりて男女の品性を圓滿ならしめ、意思を鞏固にさせ得ると信じてゐるのだ。蓋し彼等は最も饑えたる犬の前に牛肉を山積して『お預け、お預け』を連呼し、犬の之を取り得ざるを以て、犬の意思既に健全鞏固なりとするものであらう。

▲吾人の見る所　婦人も亦等しく人なるの理由に於て男女共學も贊成である。適當の制慾も贊成である。併し乍ら吾人は、饑えたる犬が肉に口を付けたりとて大事件の如く騷ぎ廻る似而非道諸家教育家には大反對である。饑えてゐるなら適當に食ふが可い。吾人の『情慾教育』は胃を損せぬ方法、消化を助くる方法、健全長命の方法である。食ひ過ぎる弊を恐れて全たく食はぬ方法では無い。

○男の主張（此の欄に投書を歓迎す）

●てよだわ廢止説　大村生

『あたし、よくつてよ。』

『あら、そんな事ありやしないわ。』

諸君試みに之を、帯きりゝと上ん前の襟少しく右に上りたる妻君に言はせて見るべし。其の端然たる姿勢は此の甘つたるき言葉の不調和に破られて、不愉快なること夥しかるべし。又試みに、お下髪かわいく口小さき嬢ちやんに言はせて見るべし。こましやくれて氣障なる事限りなく諸君の拳固は知らず〳〵其頬桁に飛ばん。

予は如何にしても此『てよだわ』よりして美感を起すこと能はず。切に請ふ世の淑女諸君、後生だから止してくれ玉へ。てよだわを聞く事一日なれば予は一日の壽命を縮め、七十五日ならば以て七十五日を縮む。諸君だつてマサカてよだわ以外發音の出來ぬ譯でもあるまい。予はモ少し優美なモ少し下等ならざるモ少し何とかした言葉のあるべきを信ず。

『てよだわ』は肉感を挑發すること裸體畫よりも甚だし。てよだわを振廻して恥ざる夫人令孃は白晝公然其湯卷を徹して大道を濶歩する人也。

●母親に申す　三國市藏

人の子の母たる多くの貴き婦人諸君。予は諸君の甚大なる勤勞と重要なる責任とに對して、最も多くの感謝と敬服とを表したいと思ふ。

けれども茲に一つ諸君に交渉したい事がある。諸君は父親の不在なるに當りて、餘りに其子に甘い。慈愛は誠に諸君の全部であらうけれど『それではお父さんに内所でね』と子の宜しからぬ要求を容れる事の屢々なのは、餘りに前後の分別の無い所業では無いか。これ兒童の公明無私なる心を傷ふこと實に大なるものである。諸君は諸君の愛に溺れて、大切なる兒の生涯を顧みぬのであるか、予は實に諸君の心事を怪しまざることを得ぬ。

諸君、諸君の兒女は唯諸君の專有物では無い。諸君と諸君の良人と、社會と、國家と、時代との共有物である。諸君願はくば反省する所あれ。

○女の主張（此の欄に投書を歓迎す）

●●●●●●●●煩悶とは何ですか

あき子

浅間山へ行つたり華嚴の瀧へ跳込んだり、此頃男子方には大層殺風景な事が流行つて居りますね。そして夫が皆な煩悶の結果ですつてね。煩悶とは一體どういふ事なんですか。

こう申すと大變生意氣な様ですが全體男子方は何事にまれ七むづかしい理窟をお附けになるのが好でゐらつしやる様です。其事ありの儘をありのまゝに仰しやれば能うく判るものをわざ／＼面倒な理窟を附けて判らなくして了ふ。煩悶とか悲觀とかいふのも矢張り其例で私の思ひますのには、煩悶とは「儘にならぬ」といふ感情、悲觀とは「あゝ厭な」といふ事なのでせう。

も少し平たく申しますと、男子方の『煩悶に堪へない』などゝ仰しやる裏面には必ず衣食の困難と色情の不滿とが潜んでゐます。いえ、潜んでゐるのではありません其の全部が夫なんです。

して見れば『あゝ、お金が無くつて困る。どうして生活さうか。善い衣服が欲しい。妻を得たいけれど相手が無い。相手があつても樂しく生活して行くのは經濟が許さぬ。』といふのが煩悶で、悲觀といふのも別段そんなむづかしいものでは無く、唯單純な『かなしい』といふのでせう。

こう判つて見れば何時までも五里霧中にヤキモキせずと、唯一歩一歩光明の方へ進む工夫をするのが利口といふものです。

此意味から見て、伊藤侯爵は憎いけれど利口です。無教育な田吾、職人なども利口です。彼等の間には絶えて煩悶などはありません。折角教育のある男子方が煩悶々々つて沈鬱になられて了ふと、私ども女性はお氣の毒で立つ瀬がありませぬ。

●●●●親の壓制

北山むら

鐵道で轢死する少女！何と云ふ悲慘事でせう！而も此の悲慘な事實は屢々新聞の三面記事となつて現はれゐるではありませんか。

それが多くの塲合は戀と親の壓制です。戀に死ぬうら若き我が姉妹を見ては、私は言ひ知らぬ悲しさ哀れさを感ずるのでありますが、其の最愛なる子を鐵路に走しむる親あるを見ては餘り腹が立つて罵る力も出ません。私どもは此んな塲合、弱い事を起さずに走て自由の地に就くべく、一會合を起したいと存じます。

○湯ぎらひの話

記者一日湯ぎらひを以て有名なる某氏を其寓に訪ひ、入浴に關する趣味ある意見を聞き得たり。左に錄するもの即ち是なり。

有名な湯ぎらひ家はアナタですねッて？ハヽヽ隨分きびしいな。實際ボクは餘まり湯が好ぢや無いね。けれども何も世間でいふ物臭太郎の様な意味で、湯が嫌ひぢや無いのだよ。湯の嫌ひなのも、おのづから理由ありさ。ナニ？其の理由を話せッて？宜しい話して見よう。

▲湯の嫌ひな理由　第一日本の湯ほど君不潔なものはありやしないよ。君等好浴家は知るまいが、湯の中で小便をする奴が隨分あるんだ。え、知つてる？知つてヽよく湯ずきになれるね。だつてそう屢々はあるもんぢやありませんて？馬鹿を云ひたまへ。大抵の湯で小便の交らぬ湯があるかい。小供もすれば大人もする。態々する奴もあるが、實際病的にどうしても出るものがあるんだ。それに麻病の奴なんぞは湯の中で小便するのが一番氣持が宜いといふ事ぢや無いか。さあ其の湯へ入つて見たまへ。汚ない汚なくないは第二にして、

▲病毒が傳染する　麻病の奴の入つた跡でヒヨツと目でも洗はうものなら、恐るべき麻毒に襲はれて、目は忽ち腫れふさがつて了ふ。眼病の原因が判らぬなどヽいふのは、大抵は湯屋か床屋かヽ原因なのだ、病毒の傳染るのは唯麻病ばかりぢや無い。皮膚病でも、色々の病毒でも皆な之を最好の傳染媒介所として待ち設け

てゐるのだ。人は能く湯で其等の黴菌が死んで了ふと云ふけれど、これは眞赤な嘘だ。黴菌の死ぬ樣な熱い湯に入れば人間樣も死んで了ふ。普通の湯では黴菌樣はホロ醉ひ機嫌で鼻唄か何かうなり乍ら湯の中をあつちこつち遊弋してゐるのだ。湯はホントに恐るべきものだよ。

▲一週一回　こんな理由からしてボクは成るだけ湯屋に遠ざかつてゐるけれどもボクの身體は御覽の通り割合に脂肪分が多いので、實の處度々入浴の必要がある。それで仕方なしに一週一回、多い時は二回行く事に極めてゐる。冬は先ア一回、夏は二回と思つてくれ玉へ。大抵の人がこれだけ行けばマア澤山だとボクは思ふね。湯ぎらひ〳〵ッて君等は多少

嘲笑の氣味で湯に行かぬ人を許する
が宜しくないね。ボクだつてこれで
田舎にゐて、据え
風呂の清潔な湯の
自由になつた時
は、毎日入つた事
もあるよ。然し温
泉場などに行つた
時でも決して一日
一回以上入つた事
は無い。あんまり
多くの入浴は、人
の健康を害するし
又、脂肪質の少な
い人などは皮膚の
美を損ずる。朝湯
の熱い奴などに毎日／＼飛び込ん
で、茹章魚の様になつてる奴を見る



と、殆んど憫笑に堪へないね。

▲朝湯と心中　ボクだつてそれは朝
湯の清潔な奴に入りたいのは山々
さ。けれども東京の朝湯ほど醜劣野
蠻なものは無い。チリ／＼と數十年
掛りで湯と心中する積りで無けりや
入れないね。つまり
朝湯は東京人の生命
を少しづゝ／＼刻ん
で行くのさ。見たま
へ東京の老人の割合
に早く老い朽ちて、
皮膚の光澤は未だ四
五十歳にもならぬ内
からガサ／＼の砂の
様になつて了ふの
を。ボクはあれが全
く朝湯のおかげだと
思ふ。

▲湯に行く時間　そ
れでボクが入浴は何時頃になすべき
かは久しき攻究の問題であつたの

だ。一番好いのは午前十時から十二時頃までだね。少し未だ熱い事は熱いが、朝湯よりは好い。其次が午後一時頃から三時頃まで、ずつと温くなつて身體には最も適當だ。湯もまだそんなには汚れてゐない。ボクは先達て迄は多く此の後者を取つた。此の時間に行くと人も込んでゐず、大分工合が善いが、困つた事には勤めが代ると同時に、前の二個の時間は全く仕事に塞がつて了つた。朝湯に行かれずとすればアトは夕方か晩だ。そうすると湯ももう大分よごれて了ふし、人も非常に込む。どうも仕方が無い。そこで長い研究をした結果、今は大抵あかりの付く少し前ときめた。此時は方々の晩飯の時間で、割合にすいてゐる。都合が善いと土曜日か日曜の午後二三時頃に行く事もある。それから序に話すが、

▲湯は臥草を抜かぬ　といふ事だ。世俗に従へば、臥草れた時に湯に入れば、其くたびれが、スツカリ抜けるといふ事だが、ボクの善く乘りつけてゐる車夫の話を聞くと、どうも然ぢや無い想だ。湯は人を疲らすもので、湯に入ると尚更にガツカリして了ふと。成るほど之も一理ある話だ。湯は酒の樣なもので、一時非常に血行を盛んにして興奮させるが、あとが其の反動でドンと弱つてくる。湯のあとに、睡眠などの長い休息があれば、其の長い時間の中には再び元氣を恢復する事が出來るけれど湯で疲れをぬいて、すぐ再び勞働に掛からうと思ふのは間違ひだよ。

○「萬朝」の裁縫競技

去月十七日、萬朝報は其の裁縫競技會を神田の錦輝館で催ほした。競技に加はらんと申出でた者は千七百人もあつたそうだが、其内から百人だけを選手に選んで、午前九時三十分から競技を始めた。電光石火の早技、見物はかたづを呑む。

◎競技の問題は　次の通り。

▲本裁、女單衣

（但し、かぎおくみだち）

△したてあげ寸法

一みは　七寸五分の六寸

一つました　一尺九寸

一そでたけ　一尺七寸

一そでつけ　六寸

一くちあき（そでくち）　六寸

その他は寸法すゐい

△ぬひかた　（はりめ約一分五厘）

一せ　二どぬひ
一えり　ひろえり
一わき おくみ ぬひこみは、みゝぐけのこと（みゝぐけとは、みゝをならすに、とぢること）
一かたあて
一えりうら
一しりあて　つけること（しりあては、えりさきのきれ）
一ともえり　なし
一そでした　ふくろぬひ
一そでくち
一ふりやつくち
一つました（たてづま）
一すそがけ（すそぐち）　三つぐけ（なりぐけ）但しくけめ二分
一そでさきに丸みをつける（但し三分）

＊　＊　＊　＊

できあがりたる單衣は、ほんだゝみにして番號札をぬひつけ、さしだすこと

◎最も早き出來　かくて始業のベルの鳴ると共に、一百枚の中形浴衣が急はしく手に觸れてパリパリ音を立てながら、右に左にうねりを打つ様は丁度浪のやうであつた。裁方が終ると早くも針は布を潜つて飛ぶ。中には足を巧みに使つて縫つてゐる人もある。最も早き出來は一時間と五十五分。早くとも二時間半は掛るだらうとの豫想が全然外れたのも嬉しかつた。

裁縫競技當選者

等級	氏名	年齡	出來上り時間	時間點	技術點	合計點
一等	山﨑　市子	二〇	二時三〇・三〇	三〇	六〇	九〇
二等	村野千代子	二三	一時五五・〇〇	四〇	四五	八五
三等	島﨑　欽子	二四	三時〇一・四九	二二	六〇	八二
四等	若山　幸子	二八	二時四八・三五	二五	五五	八〇
五號	丹羽藤枝子	二七	三時三三・五五	一五	六〇	七五

◎一番遅いの　が五時間足らず、正午一時間の休憩があつて、午後三時二十八分廿秒には、一人も殘らず仕立て上げて差出したのであつた。

◎最年少の選手　麻布區飯倉町五の三十六、油荒物商井關忠三長女仙子（十五）は選手中の最年少者で、年の行かぬだけに縫上りは一番後になつたが、それでも更に狼狽せず、極く落着いた態度であつたので、滿場の視線は齊しく此少女に集まり、皆感心して居た中にも女子裁縫高等女學院長小出新次郎氏は此少女の勇氣を賞して和洋裁縫大全といふ書籍三十冊を贈つたとの事である。

○玉菜料理

山田嘉吉

一　ボイルド、キャベージ　Boiled cabbages

▽四つ切にして水で洗ふ。虫が居るから、よく洗ふ。

△四十分から一時間まで、湯の中に入れて煮る。

▽水をよく切り、千本切にする。細かく切つてもよい。

△ソースはメトルー、ドテル、ソースを掛ける。

▽コーンド、ビーフに添へてアントレーにするには、細く長く切つて皿のめぐりに置く。

二　ベーキド、キャベージ　Baked cabbages

△洗つて其まゝ二十分煮る。

▽中を切抜く。切り出した中實を刻む。

△バターで玉葱を煎り、其處へ刻んだキャベージを交せる。

▽ポークソーセージの肉を半斤まぜる。

△ペッパー、ソートを交せ、もとの穴へ詰める。

▽之を大きな鍋に入れ、油又はバターをかけ、蓋をして爐の中へ入れ、茶色になるまで燒く。

三　スロウ　Slaw

（一）熱スロウ　Hot slaw

△芋切鉋でキャベージを薄く切りおろし、ゆでる。

▽水を切りソースを掛ける。其のソースは、

ヴエヂガル	Vinegar	一卓匙
オイル	Oil	二卓匙
砂糖	Sugar	一茶匙
鹽、赤胡椒	Salt, Cayennepepper	少し

△以上よく交せて、水二卓匙を入れ、キャベージにかけて、あたゝめる。

（二）冷スロウ　Cold slaw

▽生のキャベージを水につけ置き、こり〱させて、

△水より出した前のソースにくろめて出す

四　スプラウツ　Sprouts

▽キャベージの若い芽をキャベージの様に煮る。二十五分から三十分まで。

△之をピースと同じく取扱ふ。

○小説はがき集

根津峰子

一

『あゝ口惜しいッ。何て殘酷な奴なんだらう。人の名譽をメチャ〳〵に毀しちまつて。』

　朝の新聞を抛つて、高子はツト椽側へ出て了つた。

『あたしモウ學校へなんて行かれやしない。殘酷！そうだわホントに、あんな殘酷な奴ッて。あゝ〳〵厭になつちまふ。どーしてやらう、忌々しい、あゝ悔しい。』

　丁度階下の時計が七時を打つ、高子は机の上の包みと今にも降出しさうな空工合とを等分に眺めて、深き思ひに沈んで了つた。折から垂髪の子が三五人、書物を携へて簷下を通りながら、此方を見上げて笑ましげに禮をした。高子は曇れる眉の其まゝに又机の前に戻つてホロ〳〵と涙を零しながら、俯いてメリンスの風呂敷包みの端をいぢつてゐる。

　投出した新聞を又拾ひ上げて、その三面の下の方に見入るのであつた

「松原町の女教師さん、禮儀と云ふものは御存じですか。」――御存じですかも無いものだわ、あんなに何して置いて。「伺ひたい生」だッて、憎らしい。そんなに人の名譽が毀したけりや名乘つて出てサンザ惡口を言うが善い。松原町の女教師さんなんて云はずに。私より外に女教師があるんぢやあるまいし。人、馬鹿にするにも程がある。あーあ、情けない。あたしも到々「はがき集」の人になつちまつたんだわ。』

　高子は、その血の氣わかき頰を白ませて、スルリと膝に抜け落ちたリボンを新聞紙に投げつけた。

　新聞の上に餌を漁つてゐた大きな蠅が驚いて、微かな音を立てながら天井裏に留つた。

　又五七人女生徒が『吹く〳〵よー朝風、涼しく吹くよー』と歌ひつれて通る。

『行かなきやならないかねえ。學期のお終ひぢやあるし手も足りず――校長なんぞ如何に思つてゐらつしやるかしら。』

　下階で、内儀さんの聲として『おいきちや、先生のお下駄を其方へ揃へて置きな。』

　高子は立ち上つた。『矢張り出なき

や惡いわねえ。」

二

校長は、そんなツマらぬ事を、決して心配するには及ばぬ。馬耳東風と聞き流して置けと云つてくれた。自分に疚しい所さへなければ、と慰めて下すつた。そう別に―疚しい―所ッてありやしないもの。そうだ氣に懸けるのが愚かであつたと、高子は我と我を勵まして、一日の課業を終つて家路にと辿るのであつた。

指かゞなふれば早や六年の昔、高子は十一で高等小學校に入つたのであつた。丁度その四月一日、高子が父につれられて校長室に入ると、直ぐ其あとから母親に伴れられて來た是も十一二の温良やかな男の兒があつた。其の母親なる人は、年は高子の母より三つ四つ下の四十相恰。眼は飽までも慈愛のある、聲は落付いて、どこやらに親しい響きの、じみな懐かしい人であつた。高子は幼な心にも、我が善き母の亡き跡には、此ういふ人にかしづいたらばなど、遠き〳〵後の世にも倘光りあるを覺えたのであつた。

爾來四年、高子も其の男の兒も、同じ級の同い年、學科の出來も何も劣らぬ梅とさくら、高子が一番になれば彼の兒は二番、彼の兒が一等を取れば高子も二等になると云ふ風のいつか互ひに心の底も知りあつて、人も羨やむほどの仲よし。二年前卒業の時までは、朝に晩に唯うれしとのみ顔を合せてゐたのであつた。

卒業證書を握つた二人は、世の運命のまに〳〵西と東とに立ち別た。高子は○○市の教員講習所に、彼の人は隣り町の或商家に奉公にとて。あゝ春秋流れて二たび、高子は此の四月より松原町の小學校に教鞭を持つ身となつた。

或る朝た、紫紺の袴裾高う編上げ靴に、町外れの道芝の露を玉と轉ばせて、學校へと急ぐ途中であつた。圖らずも洋服姿の身輕ろげなる人を見た。『ヤ』『ア』とばかり、此方も彼方も驚いたものゝ、懐かしさに聞けば、彼の人は今松原町の或る工場の事務員を勤めてゐるとの事。不思議の縁と、いろ〳〵話しもしたかつたのを怺へて、其まゝ右と左り。それからは往く道歸る途中の樂しみが出來て、相見ぬ日は一日物足らぬ感じ

がするのであつた。

左樣、もう四月、或日は一二時間を人目うるさからぬ野邊に散策して共に清き友達の心を語り合つた事もある。

高子は此かる追懷に耽りつゝ歩を運んで、早や我が下宿間近に來た。ハッシ！惡夢に魘はれたる如く、高子は物怖の眼を擧げた。途端、擦れ違はんとした一人の若者は、始めて氣附いたらしく、遽たゞしく視線を彼方に外らして、急ぎ足に行き過ぎやうとする。高子の眼は異樣にもえた。何か云はうとしたもの、、其まゝ沸き立つ涙を抑さへて宿に驅け込んで了まつたのである。



止めても〳〵とまらぬ涙を、心ゆくばかり机掛ににじませて、高子はやがて筆を取り上げた。

三

高子の書いたのは彼人への手紙であつた。逢つたらば思ふさま罵しつて、怨んで、辱かしめて、此やるせなき遺恨を晴らさうと思つてゐたのだけれど、さて彼の學校の歸さ、相見た時の心地は何事！空しくも眼は燃えて、唇は

熱を病める人のそれのやう、乾からびて聲さへ得立てなかつたのでは無いか。恥ぢたるらしき彼の人の、やさしき面貌は高子の咽を固く封じて了つたのであつた。

あゝ曾て親しかりし人、何故彼の人は彼樣も餘所々々しくなつたのであらう。思ひは廻る過ぐる日の、暫らく見なかつた或朝、ふと途上で逢つたのに、彼の人はどうしたものか冷笑を含んだ目で此方を見て、何時になく挨拶もせずに行き過ぎて了つた。高子の胸は少なからず轟ろいた。疑ひに滿ちた。あゝ其朝よ。思ふも恨めしい。高子と彼の人とは、それ以來道に逢つても態と避けて、お互ひに知らぬ風。そして到々こんな事になつて了つたのだ。

高子は書き終つた手紙の封を仕かけて、又思ひ返したらしく、

「あゝ、やつぱし氣の弱いお人好の馬鹿なんだわ。先刻逢つた時何故思ふさま言つてやらなかつたんだらう。だつてそんな惡るい人ぢや無いんだもの……だけど……あんな惡口を書いたに違ひない――矢張り惡るい人なのかしら。口惜しいッ。あたし彼樣に馬鹿にされて。此樣目に逢ふ位ゐなら、モウ一層死んで了つた方が宜い。男なんて皆な彼樣薄情なものかしら。昔學校にゐた時分が一番樂しい時だつたわねえ。おッ母さんは生きてるし、友達はあるし。今ぢや、私唯た一人ぼつちなんだもの。ほんとに私を嫌つて彼樣事を書いたのかしら。あゝ厭。手紙なんか書いたつて何になるもんか。」

びり／＼と狀袋を引裂いて、丸めて投げ出したが、又新らしい封筒を書くのであつた。

四

手紙は往つて復つた。

「僕は決してそんな意味は無いのです。唯あの日から僕は朝夕一人の友と道伴にならなければならなかつたので、其の手前、わるいとは知りながら、あなたに禮を欠く事になつたのです、新聞の投書は誰がしたか、實際僕の身には覺えがありません。僕はあなたが僕の心事を諒察して下さる日の遠からぬ事を信ずるのです……」

（なはり）

○島の詩人

荒畑寒村

今年の春、私は腦が些し惡かつたので、暫らく伊豆の方へ養生……といふのが名目で、その實骨休めに行て居た。

熱海から伊東、下田へも一寸行て見た。が、一と月もすると、何處も彼處も見飽き、遊び飽きて了ひ、モウ一層東京へ歸らうかとも思たが、フト熱海から海上三里許りの、初島といふ小島へ渡つて見やふと思ひ立つた。で、早速滊船で網代まで行き、其處から隔日に出る郵便船で島へ渡つた。

が、周圍一里にも足らぬ小さな島の事とて、勿論宿屋なんていふ氣の利いたものは有りやう筈が無い。仕方が無いからマア、其の島の大屋……と島人が尊稱して居る……の家へ賴んで、暫らく置いて貰ふ事にした。

初めのうちは私も、六疊の室に閉ち籠つて居て、毎日夕刻になると、彼方の室の圍爐裡の傍で、世間話しや、漁の話しやらを、面白さうにして居る此家の人々や、島の若者等の樂しげな集會を羨むで居たが、終ひには漸々馴染も增へて、此方からも出掛けて行けば、彼方からもやつて來て、私がする東京の話し等を、大變面白がつて聞く樣になつた。

でマア、五日と一週間と居る間には、狹い島の事だから、大概な人とは知己になつて了つた。田舍へでも行て居ると、一番親しく交際するのは、マア大抵小學校の先生と駐在巡查だが、私もその例には洩れないで、此處の小學教師の山田といふ男とは、話しがよく合ふので、ショッ中往來して居た。

私がいま話さうと思ふのも、實はその男の事なのだが、その前にまづ、島の荒增しを話して置かなきやなるまい。

熱海の方を旅行した人は、丁度江の島位な小島を、程近い海上に望んだであらう。あれがそうなのだ、周圍一里もあらうかといふ小島で、戶數は僅かに四十二戶しか無い。それで如何いふものか、是れ以上戶數を增やさない、人口が多くなると皆內地へ出掛けて了ふ、男は漁業を營み、女は家事や農業等をやつて居る。農

業と云つても、島の頂きに二十町歩許りの畑がある計りで、麥と野菜も些しは作られるが、人戸を増やさないといふのも、ソンナ食物の點等からかも知れない。

だから、見る處と云つちや一向無し、それア眞個に詰らない處だけれど、景色と云つたら堪らなく好い。東の方は海上遙かに大島が横たはつて、一條の噴煙ほのかに棚曳いて居る。殊に夕暮れ、夕陽伊豆連山の後に落ちやうとして、胸邊り迄を露はして居る富嶽が、輝いた葡萄色に染まる時は、實に何とも云はれぬ感がする。

生活の荒浪も寄せず、輕薄な都人士の來る事も尠い故か、此島の人は皆な、飾り氣の無い、諄朴な、實に親しみ易い人達だ。巡査などは月に一回か二回位、熱海から巡廻にやつて來るのだそうだけれ共、何の用もありやしない。乞食も居なけりや泥棒も居ない、夏になると皆家の戸を開け放して寐るのだといふが、それでも塵一つ失なつた事は無そうだ。

島の頂きには櫟、榛、松等が、畑を園つて林をなして居る。そしてまた、棕梠、蘇鐵等の間に、花のまつ赤な椿の樹が交つて居るなど、そゞろに南の國の風趣を偲ばしむる。磯には大きな石ばかりだ、そして其の磊々たる石の間には、可憐らしい姿の豆の花が、縱横にはびこり咲いて居る。それからまた、此の島には水仙が非常に多いので、水仙島とも呼ばれて居る。冬になると香りの高い水仙の花が、畑の畔と云はず、道端

と云はず、處一面咲きはびこつて、全島水仙の花と香りとに覆はれて了ふ。

巡査駐在所一つ無いのだが、それでもお寺と小學校とはチヤンとある。で、先刻の山田といふ男は、此の小學校の先生なので……。

校舍は固と寺院だつたさうで、その本堂が今は教場になつて居る。門には『熱海町立初島尋常小學校』と書いた看板が、嚴めしく掛かつて居る。教場には二人並びの机が四脚づゝ、五列に並べてあつて、突き當りにはボールドが四面、壁には地圖やら、敎訓書やらが掛かつて、本棚の上にはチヨーク函や、手製らしい海產物の標本やらが置かれてある。生徒は皆なで三十人も居やうか、何しろ腕

白盛りの子供が、一と處にかたまつて居るのだから堪らない、傍で見て居ても頭が狂つて了ひそうだ。

敎場の隣室は八疊許りの室で、爰には山田夫婦が住んで居る。室の眞中に大きな爐が切つてあつて、煤ぶつてまつ黒になつた高い天井からは、笊が一つ釣り下げてあつて、その中には密柑の皮と何かゞ入つて居る、室の隅には机が一脚と、本箱が二つ並んで居る。そして臺所に近い方には、織機臺が据へてある。

山田先生は伊東の人で、二十五……六位にはならうか、色の蒼白い、そして狹い額に髮の毛が被さつて居……る處など、一寸から神經質らしい沈痛な俤も見へるが、その細い、浮く〵した、甲走つた聲を聞くと、何だか浮氣な、ものに飽つぽい性質のやうにも思はれる。そして、何か話す時、乾度語の間へ『しも』といふ伊東邊りの方言を交へるのが、恐ろしく私の氣に障つて、それをやられると『ア、またか』と思はず眉をしかめる。然し至つて氣の小さい、殊に文學上の趣味等一致するところから、私はよく尋ねて行ては話して見た。

ある日……そう丁度土曜日だつた。私が正午から尋ねて行くと、先生自分の室で、生徒の習字を直して居る處だつた。机の上には、何かの草稿らしい罫紙帖やら、パーレーの萬國史やら、文學雜誌やらが、雜然として置いてある。で、マア色々な話しの末、私は斯んな事を云つたと思つて居る。

『それア不自由位な事は堪へなきやならない、私見たいにショッ中都會に住んで居て、蒸れた樣な、臭い汚れた空氣を吸つて、練瓦と瓦と鐵ばかり見て〳〵そして石よりも冷たい人情の間に生きて居る者には、此處なぞは眞個に極樂の樣な感がしますナ。』

『そう云やそうでせうナ、實際私なぞでも斯ういふ處に居ると、詩人ならざらんと欲するも得ず、ですよ。』と云つて、一寸肩を聳やかして、ハ……と取つて付けた樣な笑ひ方をする。

『イヤ然し、何かお作りになつたものがありますか。』

と私は問ふて見た、乾度新體詩か何かやつて居るのだらう、と思つた

ので……。

『エ、ナニ一向詰らないものですけれ共。』

と、一寸上眼で私の眼を見て、體を後に捻つて机の上から、その罫紙綴の草稿を取つて出す。『藻鹽草』と題してある表紙をハ子ると、『藻鹽草一篇、われは是れを、松青く波紫なる礒より得たり』と記してある。二十字詰め十九行の罫紙が百枚足らず、短長の新體詩數十篇、余り感心する程のものは無かつたが、然し中にはまた、万更捨てたものでは無いのもある。

私は一と通り眼をとほして、そしてまた、パラ〳〵と無意識にそれを繰りながら、

『是れだけの詩才を有て居ながら、

空しくこんな處に埋もれて居のは、實に詰らないじやありませんか君。』

と私はサモ惜しい、と云つた樣な態度をして、一寸油をかけて見た。

『然しそんなものじやまだ、詩なんていふ資格は無いンですからナ。』

とワザと沈着いて云つては居るけれども、その蔽ひ切れぬ得意と誇りとは、鼻の頭に寄せる微かな笑や、輝いた瞳に充分あらはれて居る。

『ナーニ君、そんな事があるもんですか、是れなら充分東京でも出版する處がありますヨ。』

と私は眞面目で云て見たものだ。

と、山田はもう眞實眞面目な、且つ非常に熱心な態度で言ひ出した。

『私が此處に渡つてから、今日迄五年間といふもの、休暇を除く外は一日だつて缺かした事なしに、いろはとアイウエオとを教へて居るのです。で私は何も決してその爲めに島人から尊敬されやうの、禮を云はれたいの、といふ樣な考へは持つて居るんぢやありませんが、眞實私が來たので此島の子供の眼が開いたといつて宜いのです。が實際を云ふと、私は此頃この生活が厭になつて來ました、子供と一緒になつて、いろはを怒鳴つたり、アイウエオを喋べつたりするのに倦いたのです、それア此島は平和です、生活の苦鬪なんていふ事は見たくも無い、然し私はモウその平和に倦いて了つた。平和な生活、平和な家庭、私はその家庭にも……。』

云ひかけて山田は臺所の方を見や

つた、妻君の姿は見へないで、長閑な春の日を浴びて、地面を啄いて居た鷄が、突然ドモる樣に鳴きながら椽側に飛び上る。

『私の妻は此島の者なんです。一緒になつてからモウ四年にもなりますが、私は眞實失望したです、彼女は些とも私の理想や趣味を解してくれない、唯だ從順な温良な家婦たるに過ぎんです。と云つて何も私は彼女を愛さんのぢや無い、充分愛しても居るし、また彼女も私を愛して居るのです。然し私は今はモウ、小さな人間の愛の爲めに欺むかれない。』

山田の妻君はお雪さんと云つて、多分山田よりは三つ四つ年下だらう。私の泊つて居る大屋の隣家がその實家なので、まだ山田が其家に同居して居た時分、互に戀に落ちて夫婦になつたのだといふ事を、何日の晩自宅の人から聞いた事があつた。美人じや無いが、色白の邪氣無い顏をした女だ。

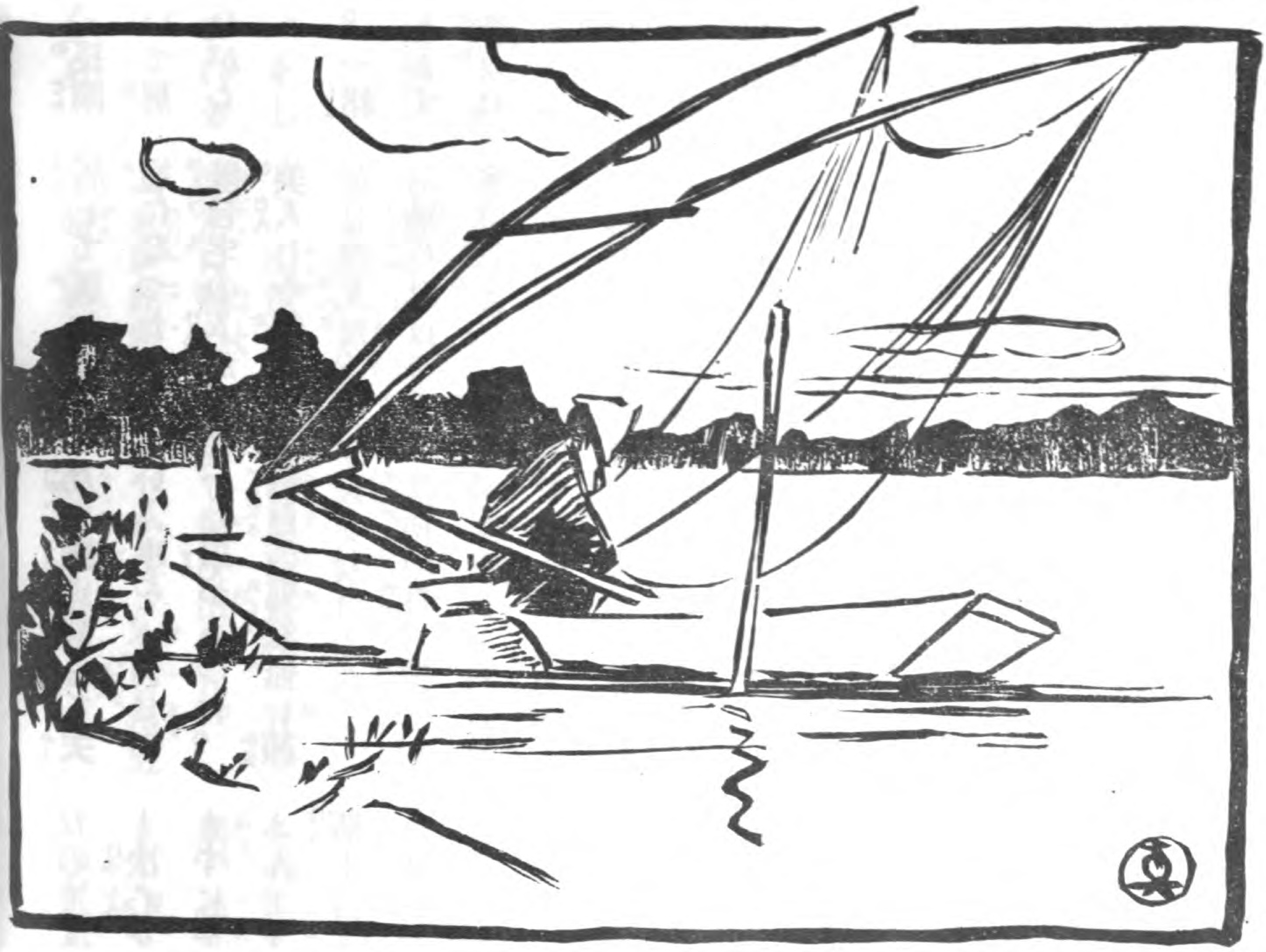
『畢竟私は平和な生活以外、樂しい家庭以上に、私の爲すべき、爲さねばならぬ或るものがあるのを自覺したのです。貴方は人生の苦鬪に疲れて、平和な生活を欲して居ると云はれたが、私は平和な生活に倦いて、人生の苦鬪を試みたいのです、かう云ふと貴方は私を氣紛れ者の樣に思ふかも知れませんが、實際私が詩人として東都の文壇に立たうと志したのは、決して昨日や今日の事じや無いのです。然し私は未だ自分の詩作の技倆に就て、不安な念を抱いて居たのですが、貴方は私に非常な勇氣と決心を與へて下さつた。ナーニ撓まずにやれば乾度名を成し得ると思ふんです、然し實際東京で是れを出版してくれる處がありませうかネ。』

山田は草稿を取り上げて、膝の上にくり廣げたが、その眼は空想に燃ゆる樣に輝いて、隱し切れない誇らし氣の色が、自づと頰の邊りに浮ぶ。私は『フン生意氣ナ』と云つた樣な感じが、何故か知らぬが胸に浮んだので、宜い加減に應らつて置いて、近頃の詩風やら、新らしい技巧やら、私の知つた限りの作家の噂などをして、日暮れ頃學校を辭した。

夕陽は今しも伊豆連山の背後に落ちやうとして、群立つ雲の間から光線を迸射して居る、熱海の町邊りは

未だ明るい。私は恁んな事を思ひながら、磯の岩道を辿つて行つた。『ナンノあの男に何が出來るものか、子供のやうな空想に驅れて、東京等へ飛び出したつて、また直ぐ島が戀しくなるに定つて居るサ。理想だの、天職だのと云つたつて、それは、モウ宜い加減ものに倦きた時分、何か目新らしいものを捉まへたに過ぎないンだ。新らしいもの斗り戀しがつて、それで直ぐ倦きる、謂はゞ移り氣なんだ。……フ、ン俺によく似て居らア。』

家へ着いて、私の室へ入



ると、私は机の上に顔を伏せて、過ぎ越し方を想ひめぐらして、苦がい悔恨の涙に咽んだ。

　それから直き、私は東京へ歸つて來た。

　山田には早速、滯在中種々世話になつた禮やら、上京したら是非寄れといふ事やら認めて出した。すると折返して、私が歸京したので急に寂しくなつたとの事や、自分は益々現在の生活が厭になつて、上京の念が熾んに燃へて居るといふ事や、自己の理想の爲には、妻も生命をも顧みないといふ事やらが、烈しい情熱の

こもつた筆で、細々と記した手紙が來た。

それから二月、三月、私は急がしいのと、生來の筆無性とに取り紛れて、一向手紙も出さなかつたが、山田からは何でも四五通、明日にも行くといふ樣な手紙が來たかと思ふと、また島の人達に對して、今更そうするのも恥かしいとか、自己の功名心の爲めに、妻を犧牲にするに忍びないとか、頻りに矛盾に煩悶して居る樣な手紙が來た。

然しそれからは何の音信も無い。上京したら何を措いても尋ねる、と云つて居たのだから、來れば直ぐ私の家へ寄らなければならないのだが、そんな樣子も無い處を見ると、矢つ張り島の子供にアイウヱオを敎へながら、兀々として詩作に苦しんで居るのだらう。

○田舎漢　なめし

頃者田舎より若者來りて予の元にあり、午食の後晝寢す、家人呼び起こして晩餐を薦めんとすれば、嗽ぎ、顏洗ひ、恭しく額づきて、

「お早う」

或時町に連れ立ち行きしが、青物屋の米吉とやらんいふ家の障子を見て、

「八百米」

おわーい〳〵と黄な聲にて呼び歩るくものあり、

「あれは何賣りですかね、」

町にてコーヒー入牛乳一杯づゝを平げて歸る、家人に向ひ、

「今日はシルクホールを御馳走になりました」

皆幾度か繰り返されて耳古たれど、目のあたり經驗しては、また、をかしければ、かくは書附けぬ。

ほの影　徳永狂風

深川の水にのぞめる宿の春窓に灯をおき船をみる人

とつぎ來し家の柱の倒ふるゝをよろこぶ子なり君を思ふて

空黄しぬ砂をまじゆる熱風の大路をゆくや夏の日の街

この瞬間わが眼は君にとらへられ盲ひぬかくて導びかれけれ

灰色に夕べ雲しぬ奥津城のうつろの中にわれゐる心地

胸の底君か獄舍のうたがひの暗に封じぬまもると如く

この期にも長閑に煙草をふく人に憎ますてす猶そふてあり

天の原いま百人の少女ありて隊なすと見む銀河の流

街の歌女もまじりうたひ行く夕べ若衆の浴衣づれかな

こどものくに

○强い裁縫師（一）

深尾　郁

お天氣のいゝ或る夏の朝、脊の小さい一人の裁縫師が、窓ぢかい裁縫臺に凭つて一心に仕事をしてをりました。すると、彼方の町から此方の町へ『ジャムやジャム、上等のジャム！』と呼びながら、身なりの美しからぬ女がやつて來ます。裁縫師はチョッと其の小さな頭を窓の外に出して、『モシ〱内儀さん、少し貰はうよ。』と云ひますと、女は重たそうな籠を變な工合に頭に載けたまゝ裁縫師の窓にやつてまゐりました。『ジャムは色々御坐います。どれも上等で皆な飛切り安う御坐いますよ。』女はお世辭を云ひながら澤山買つて貰はうと思つて、あちこちの入物を開けて見せました。裁縫師は一々手にとつて香ひを嗅いで見ながら『あゝ之れが一番いゝやうだ。これを二斤だけ衡けてくれないか。』もつと澤山買つて貰はうと思つてた女は、ブッ〱云ひながら、やつと二斤だけ賣つて、『ジャムやジャム』と又呼びながら出て行きました。あとで裁縫師は大ぎれにパンを切つて火鉢の網に掛けながら、其上に新らしいジャムを塗つて『旨さうだな。然し、之を食べる前にチョッと此やりかけのチョッキを縫ひ上げて了はなきやならない。』それでパンを傍に置いて縫ひ續けました。一針々々だん〱に仕事がおしまひになるので、裁縫師は喜んで精を出すのでした。

ジャムの香りは大層高う御坐いました。で、壁にたかつてゐた蠅はダン〱とパンの上に集まつてきて眞黑になりました。『あゝ誰がお前に來てくれといふものか。』裁縫師は此う云ひながら蠅を逐ひましたが、蠅には人間の言葉は判りませんから又直ぐに寄つて來て、數は前よりも多くなりました。それで裁縫師もとうとう忍耐が出來なくなりまして、何か追拂ふ道具は無いかと、身體の邊りを見廻しましたが、丁度そこに布の裁ち殘りがありました。『よし、待つてろ今之をやるから。』と、いきなり夫で蠅の群を打ちました。七疋の蠅は足が取れたり潰されたりして死ん

で了ひました。『どうだ、えらいもんだらう。町中の人間に知らせてやらなきやならない。』と、裁縫師は自分の強いのを喜びながら、急いで其帶に『一打に七人』と大きな文字を縫ひつけて、『町中、ウム町中ぢや駄目だ。もつと廣い〱世界中の人に知らせてやるんだ。』

　裁縫師は自分がモウ大層強いえらい人と思ふにつけても、裁縫師なんぞしてゐるのがバカ〱しくなりましたので、其字を書きつけた帶をして世界中を廻つて歩かうと心を決めました。

　さて愈よ家を出る時、何か持つて行くものは無いかしらと家中を探して見ましたが、別に何にもありません。唯だ古くなつた蜜柑の食べ殘りと一羽の鳩があるばかりでした。裁縫師は自分の縫つた洋服を着て、其蜜柑と鳩とをカクシの中に入れて、そしてとう〱家を出ました。

　喜び勇んで歩いてまゐりますと、やがて道はトある高い山の頂上に出ました。そして其頂上で岩の上に坐つて心地よげに方々眺めて居る一匹の怖い鬼に出會ひました。

　裁縫屋はズカ〱と其傍へよつて『ヤ、君、御機嫌よう。君は此處で廣い世界を眺めてるんだね。ボクも運だめしをしようと思つて今出掛けた處だ。どうだい君も一緒に行く氣は無いか？』

『何だと生意氣な。此の乞食小僧が！』

『嘘だと思ふなら證據を見せてやらあ。』裁縫師は上衣のボタンを外して『ヘン、おれが如何な人間か玆へ來て之を讀んで見ろ。』

　鬼は『一打に七人』を讀んで、七人といふのは勿論人間の事だと思つたので、少しは敬ひの心を起しましたが、それでも試して見やうと思ひ、小石を取上げてシッカリと握つて、水のポタ〱落ちるまで力を入れて搾りました。『キサマが口で言ふほど強けりや、さあ一つやつて見せろ。』

『何だそんな事か。』と男は石を拾ふ眞似をしてカクシの中から蜜柑を出し、その汁の出て來るまでシッカリと握り潰しました。『どうだ降參したか。キサマのよりも些とうまい樣だぞ。』

　鬼は、小さな男もこりや馬鹿に出

こどものくに

○強い裁縫師（一）

深尾韶

お天氣のいゝ或る夏の朝、脊の小さい一人の裁縫師が、窓ぢかい裁縫臺に凭つて一心に仕事をしてをりました。すると、彼方の町から此方の町へ『ジャムやジャム、上等のジャム！』と呼びながら、身なりの美しからぬ女がやつて來ます。裁縫師はチヨッと其の小さな頭を窓の外に出して、『モシ〳〵内儀さん、少し貰はうよ。』と云ひますと、女は重たそうな籠を變な工合に頭に載けたまゝ裁縫師の窓にやつてまゐりました。

『ジャムは色々御坐います。どれも上等で皆な飛切り安う御坐いますよ。』女はお世辭を云ひながら澤山買つて貰はうと思つて、あちこちの入物を開けて見せました。裁縫師は一々手にとつて香ひを嗅いで見ながら『あゝ之れが一番いゝやうだ。これを二斤だけ衡けてくれないか。』もつと澤山買つて貰はうと思つてた女は、プツ〳〵云ひながら、やつと二斤だけ賣つて、『ジャムやジャム』と又呼びながら出て行きました。あとで裁縫師は大ぎれにパンを切つて火鉢の網に掛けながら、其上に新らしいジャムを塗つて『旨さうだな。然し、之を食べる前にチヨッと此やりかけのチヨツキを縫ひ上げて了はなきやならない。』それでパンを傍に置いて縫ひ續けました。一針々々だん〳〵

に仕事がおしまひになるので、裁縫師は喜んで精を出すのでした。

ジャムの香りは大層高う御坐いました。で、壁にたかつてゐた蠅はダン〳〵とパンの上に集まつてきて眞黒になりました。『あゝ誰がお前に來てくれといふものか。』裁縫師は此う云ひながら蠅を逐ひましたが、蠅には人間の言葉は判りませんから又直ぐに寄つて來て、數は前よりも多くなりました。それで裁縫師もとうとう忍耐が出來なくなりまして、何か追拂ふ道具は無いかと、身體の邊りを見廻しましたが、丁度そこに布の裁ち殘りがありました。『よし、待つてろ今之をやるから。』と、いきなり夫で蠅の群を打ちました。七疋の蠅は足が取れたり潰されたりして死ん

下了ひました。『どうだ、えらいもんだらう。町中の人間に知らせてやらなきやならない。』と、裁縫師は自分の強いのを喜びながら、急いで其帶に『一打に七人』と大きな文字を縫ひつけて、『町中、ウム町中ぢや駄目だ。もつと廣い〳〵世界中の人に知らせてやるんだ。』

裁縫師は自分がモウ大層強いえらい人と思ふにつけても、裁縫師なんぞしてゐるのがバカ〳〵しくなりましたので、其字を書きつけた帶をして世界中を廻つて歩かうと心を決めました。

さて愈よ家を出る時、何か持つて行くものは無いかしらと家中を探して見ましたが、別に何にもありません。唯だ古くなつた蜜柑の食べ殘りと一羽の鳩があるばかりでした。裁縫師は自分の縫つた洋服を着て、其蜜柑と鳩とをカクシの中に入れて、そしてとう〳〵家を出ました。

喜び勇んで歩いてまゐりますと、やがて道はトある高い山の頂上に出ました。そして其頂上で岩の上に坐つて心地よげに方々眺めて居る一匹の怖い鬼に出會ひました。

裁縫屋はズカ〳〵と其傍へよつて『ヤ、君、御機嫌よう。君は此處で廣い世界を眺めてるんだね。ボクも運だめしをしようと思つて今出掛けた處だ。どうだい君も一緒に行く氣は無いか？』

『何だと生意氣な。此の乞食小僧が！』

『嘘だと思ふなら證據を見せてやらあ。』裁縫師は上衣のボタンを外して『ヘン、おれが如何な人間か茲へ來て之を讀んで見ろ。』

鬼は『一打に七人』を讀んで、七人といふのは勿論人間の事だと思つたので、少しは敬ひの心を起しましたが、それでも試して見やうと思ひ、小石を取上げてシッカリと握つて、水のポタ〳〵落ちるまで力を入れて搾りました。『キサマが口で言ふほど強けりや、さあ一つやつて見せろ。』

『何だそんな事か。』と男は石を拾ふ眞似をしてカクシの中から蜜柑を出し、その汁の出て來るまでシッカリと握り潰しました。『どうだ降參したか。キサマのよりも些とうまい様だぞ。』

鬼は、小さな男もこりや馬鹿に出

來ないと思ふばかりで、默つてをりましたが、やがて又別の石を拾つて高く空に投げ上げました。石は高く高く飛んで、見えない程に揚がりました。『さあ小僧、もつと旨く出來るならやつて見ろ。』

男は『ウム大分うまく投げたな。けれどもキサマのは直ぐ地へ落ちて來たぢや無いか。おれのは左樣に低いんぢや無い。高く／＼モウ二度と地へ歸つて來ないほど高く投げるんだ。』といひながらカクシから鳩を出して投げ上げました。鳩は自由になつた事を喜んで、高く／＼飛んで見えなくなり、勿論二度と歸つてはまゐりませんでした。『どうだい、兄弟分！』と男がいふと、鬼は『ウム確かにうまい。だがもう一遍ためしてやる。キサマが何か荷物を搬ぶのに強いかどうか。』

で鬼は直ぐに男を恐ろしい大きな樫の木が地の上に倒れて居る所に連れて行きました。『キサマがほんとに力があるなら、今おれが之を森の外へ搬び出すから手傳をしてくれろ。』『よし來た。』と男は承知して、『ぢや此しやう。キサマが一番輕い根の傍を持て。そうすれば、おれが一番重い枝の處を持つてやらあ。そうしておれが後から押してやるからキサマが先へ歩くんだ。』そこで鬼は男の云ふ通り幹の太い所を肩に載せて歩き出しました。男は葉の茂つてる枝の中に乘つかつて、『何だ馬鹿に輕いぢや無いか。』と云ひながら口笛なんぞ吹いて居ります。併し鬼は一生懸命、

玉の汗を流し／＼舁いで行くのですとう／＼途中まで行くと流石の鬼もモウ忍耐が仕きれなくなつたと見えて、鬼は『ちよつと待つてくれ、木を下ろして休むから。』と苦しさうな聲で叫びますので、男は直ぐ木から飛び下りて枝を兩手でサモ持つてたといふ風に抱えて、『大きな癖に、これつぱかしの物が持てないんだなあ。』

二人は又それを舁いで歩き出しましたが、道端の櫻の木の所へ來ました時に、鬼は其梢の尖を持つて地面の方へ曲げて來て、それを男の手に渡して、澤山生つてゐる赤らんだ櫻實を取つて食べろと云ひました。それで男が取らうと思つてるときに、鬼が持つてた梢を手放しましたので

木は空中に撥ね返り、男もそれと一緒に高く撥ね飛ばされました。そしてドンと地面に落ちて參りましたが幸に何の怪我も無かつたので、唯シカミ面をして居りますと、鬼は冷笑つて『一體何をしたんだい。あんな箒の先みたいなものも持つて居られないのかい。』男は此う答へました。『バカを云つちや不可い。一打に七人殺せる者が、それつぱかりの力が出ないと思ふのか。今あすこの藪の中で誰か鳥を打つて居るから、チヨツと飛び上つて見たのだ。さあキサマにも出來るならやつて見ろ。』で鬼も飛び上つて見たが、枝の所に屆いたばかりで飛越す事が出來なかつたので、とう／＼又男の勝になつて了つた。

そこで鬼は此う申しました『キサマは實に强い男だ。今夜はおれ等のゐる穴へ來て泊つて行かないか。』男は早速それを承知して鬼に蹤いて穴に行きますと、そこには大勢の鬼どもが、今丁度夕飯の時と見えて、爐のわきで頻りに羊を炙つては食べて居りました。

小男の裁縫師は『あゝウチの仕事場よりは餘ッ程廣いや。』など丶心の内に思ひながら四邊を見廻してゐました。すると鬼は一つの寢床を指さして、それに寢ろと敎へてくれましたが、それは此の小男にはバカに大きくて仕方が無いので、男は其片隅にもぐり込んで寢て了ひました。かくとも知らぬ鬼共は、夜半に男を殺して了はうと思つて、大きな鐵の棒を持つて來て其寢床を力一杯に打ちましたが、夜の明けた時、平氣な顏で起きて來た男を見ると、『こりやたまらない』と思つてか、鬼どもは皆なチリ／＼バラ／＼どこかへ逃げて行つて了ひました。

そこで男は其處を立つてズウツと歩いてまゐりましたが、丁度天子さまのお城の前まで來た時にはモウ大變くたびれて了つたので、そこの草の上に寢ころんで其まゝ睡つて了ひました。其内に人がそれを見つけて病人か何かぢやあるまいかと見ますと、帶に例の『一打に七人』と書いてあるのです。『まあどんなに力のある人なんだろう。戰爭の時には嘸役に立つだろう。若し要らなければ出してやるばかりだ。』と、それから此

の事を天子さまに申上げました。天子さまは『それは重寶な男だ。一廉の役に立つだらう。目が醒めたら直ぐ連れて來るが善い。臣下にしやうから。』といふので、お側の者を迎へにやりました。使ひの者は久しく待つて、男が目をさますと、自分の用向を話しました。男は『ウム宜しい面白い。こちらからも望む所だ。』といふので、直ぐ天子さまの臣下になつて、立派な家を貰つて住んでゐました。

　ところが之を見た外の大將たちは大層心持を惡るくして、あんな何處の馬の骨か判らぬものを天子樣が可愛がつて、あんな立派な家に住はせるなんて云ふことは間違つてゐる。あとから來た癖に、おれたちの處に挨拶にも來ないとは失敬な奴だ。どうかして彼奴を逐出して了ひたいものだ。と色々相談しましたが、何分、向ふが強い男ですから、若しウカと喧嘩でも吹きかけて、一打に七人づつも打殺された日には堪らないといふので、此上は天子樣に願つて逐出して頂くより外は無いと、直ぐに其事を天子樣に申出しました。『天子樣私どもは一打で七人も殺す樣な男と一緒に何かするのは嫌で御坐います。』それで天子樣も、一人の男のために今まで永年の間忠義に勤めてゐた大將たちを苦しませ、これが自分を棄てる樣になつては大變と、大層心配をなさいまして、其の大將たちに向つて言ふには、『もう決してあんな者を大切には思ふまい。喜んで彼の男を逐出してやりませう。』けれども困つた事には、あの男は一打で七人も殺すのだから、若し逐出すと云へば、怒つて天子樣や大將たちを殺して此の國を奪るかも知れないのです。それでどうしたら善いかと色々考へた末、やう〳〵一つの計略を考へ付きました。（つづく）

○やたら書

畑耳木　好子

◎本誌の編輯員根津峰子さんが汗を拭き〳〵『どうも此樣に困つた事ありませんわ。もうどんなに驅けずり廻つたつて原稿は集まりやしませんもの。何が何だつてアナタ、アタシが此の編輯局へ來たのが十九日でせ

う。そして二十一二日には他からの原稿は〆切らなけりやならないんでせう。畑に豆を蒔いたつて生へるまでにや三日や五日掛りますのに、いくらムチヤなアタシでも明日までに書いてくれ、明後日までにと、螺旋を捻つて水でも出すんぢやあるまいし、寄書を願つて歩るく事も出來ないぢやありませんか。ねえ好子さん然ぢや無くつて?。感興ッてものは、然う重寶に湧かないから困つて了ふのねえ。』こう云つてサモ失望したらしい笑顏に、編輯帳をくり返してゐらつしやる。

◎『けれどもねえ峰子さん、そんな事云つてたんでは一日の雜誌が出來やしないぢやありませんか。アタシたちが編輯員になる、すぐ發行がお

くれるぢや、餘り見ッともよかありませんわねえ。どうでもして兎に角間に合せて見やうぢやありませんか。』と私が云ふと、峰子さんもモトモト然うと思つてらしつたと見えて、『ぢやねえ好子さん、どんなに見つとも無いものでも、今度は如何にもして作らえて見ませうね。』こう仰しやつて、編輯長に御相談をすると、編輯長も御同感、まあ何にも準備の無い新仕事、三日や五日で完全なものゝ出來やう筈は無いからといふので、方針はそれとして、私ども何なりと一文づゝ書く事に致しました。

◎峰子さんは翌朝までに『はがき集』といふ小說を書いてゐらしつた。『もう氣が乘らないで乘らないで、迚も書けなかつたんだけれど、もし之が書けないと一大事だと思つたので、むりやりに進まぬ筆を鞭つて、痛い頭を抱へて書いて來ましたのよ。もう日が迫つて書く事は、ほんとにほんとに懲り／＼。』と、もうそれはそれは大層な言ひ譯つき。

◎ところが私はどうでせう。生來の唯だノンキ坊、考へが浮ばぬ／＼ととう／＼二日を徒に過して了つたので、今日こそはもう〆切といふ日、あゝ絶體絶命、編輯員の責任として何なりと紙に墨ぬらでは濟まぬ場合になつて了ひました。塗らでは編輯長にすます、塗れば讀者の皆さまに相濟まずといふ、兩板ばさみの此の私が、せつぱ詰つての『やたら書』、なるたけなら此處だけは讀まずに通して頂きたう御座います。

◎或る女猫を飼つてる家の奥さんが心配さうに申されますのには、「ほんとに困つて了ひますわ。女猫も子を產まないんだと善いんですけれど、聞いて下さいまし、あんなにさかりが付いて出あるいてばかり居りますんです。あれで子でも出來て御覧あそばせ。其の處置に困つて了ひますわ。」それで私が『眞實ですわねえ。』と申し上げますと奥さんは、『私こう思つて居りますの、さかりの時だけは箱へでも入れておいて戸外へ出さない事にしたらよからうと。』ずゐぶんですわねえ。

◎猫を箱に入れておくと云ふ事に就いて、ちよつと『箱入娘』といふ事を思ひ出しました。罪な事もあつたものです。

◎私が前に駿河の岩淵町に滯在して居りました時の事で御座いました。岩淵は『栗の粉餅』といふものが名物だといふので、宿の主人がある晩親切にそれをこしらへてくれました。何の事は無い『あべ川』みたいなものでしたが、私がそれを物珍らしげに味つてをりますと、主人が、『どうです、栗の味がしますか。』と尋ねますから、私は餘り栗の味もせぬ樣だがとは思ひながら、よく判らぬので、多少お世辭のつもりで、『然ですね、少しは致します』と申しますと、居並んでた一家族が一時にドッと吹き出すではありませんか。私、興をさまして能く〱聞けば、何の事、事件の眞相は此うなので御座いました。『昔は眞正の栗を粉にしたものだけ

れど、今では其代りに豆の粉を餅につけるのだから、實際は豆の粉餅で、それを昔ながらの名の「栗の粉」といつて賣つてるのです。』

◎ある夕方、散歩してフト神社の傍を通り懸りますと、大勢人が集つてゐるので、物數寄な私がちよいと顏を出して見ましたが、驚きました。まあお氣の毒に、年頃十八九の若い男の人が――左樣白地の小颯張した浴衣に晒の襦袢を襲ねて、黒メリンスの太い兵兒帶を〆めて居りました――が、どうでせう！手擦の樣に出來てゐる石垣に、凭り掛つて、多分空の、塒へ急ぐ鴉にでも見とれたものでせう。其つもりが石垣の間に入つて取れないんです。入る時には何とも無くスルりと入つ

たものでせうが。出さうとなると、耳朶が逆に疊めるので、どう焦慮つても外れないのではありませんか。其内に大勢人が來る。若い人の事ですから恥かしがつて眞赤になつてるんですけれど、あせればあせる程とれないで、とう〳〵耳から血が流れ始めたのです。私はモウ見るに見かねて、ツと其處へ行つて（隨分思ひ切つてですよ。）兩手を其の方の頰に當て丶、よう漸と入つた指の尖で耳朶の下を押へてヂツと力を入れる。と、血に潤つてか但しは私の誠の通つてか、運よくも段々に頭は垣の外に出ました。それがすつかり外れました時、闇の、よくは判らぬ男の方の目には、いぢらしや涙が浮いて、『有難う』と唯だ一言、お禮を云つて

下さいました。私あんな嬉しかつた事は生まれて以來覺えませんの。

◎編輯長に、讀者の皆さまから小説やら隨筆やらの投稿を募つたらと御相談を致しましたところ、『あなたが引うけてやつて下さるなら宜しからう。』とのことで御坐います。就きましては、足らはぬ私の餘りに差出がましい樣では御坐いますが、皆さまのすぐれたる玉稿を拜見いたし、何かの心得草にも致したいと存じます。小説、隨筆、短文、感想、何にまれ、平民書房編輯局内私宛にて御送り下されますやう。そして誌上に掲げましたものには些少な御禮を致します。

○猫の日誌

梅雨の半ば、何處も此處もじめ〳〵して心地のわるき事いふばかりなき日の夕がた、お絹鐵が約束の子猫を貰つて來てくれた。

猫の原籍は、角筈村のとある裁縫の御師匠さんの家で、親猫が猪食つた報いかどうか知らないが兄弟だくさんの、お師匠さんもホト〳〵持てあまして居たのだとの事。

聞けば、今日堺家で貰つて來たのも此の兄弟で男猫、當世流行の朽葉を極く淡くした樣な毛色、男猫には惜しいハイカラである。ウチに來たのは容色は多少劣るが、美人系統と見えて之も可なりな、殊に表情の中々によい、可愛い丶顏の牝猫で、色

は三毛。
　生まれてから未だ一月餘りしか經たぬといふので、體量はタツタ百匁。ニヤーと鳴く事が出來ないで、まだミー、ミーと鳴いてゐる。世は塞翁の馬かお師匠さんの猫か、何が仕合になるか知れないもので、碌々人の世話にならずに來たせいか、そのヨチ〳〵した腰で、もう馳け歩るく事は知つてゐる、人が歩くと其足を目懸けてジヤレつく事さへ知つてるのだ。けれど流石に、手毬を轉がしてやると、見なれぬ大き



な怪物が來たと思つてか、脊を高くして後退りする。親に早く別れた不仕合せな子、それでもマア歳よりは割合にませてゐるのが切めてもの仕合せ、ドうか此の子を無事に育て上げてやりたいと心を碎くのが、吾々の心盡しであるのだ。
　取敢えず、擦り粉をこしらえて煮てやる。淺い皿の上へ置いてやるけれど獨りでは飲まないので指につけてやると旨さうに舐る。そして附いてるのが無くなると、その指をば親の乳首の様に一生懸命に吸はうとする。

其夜は大分温度が低かつた。人間の蒲團へ入れて寢かして、若し押潰しでもすると可憐さうだからといふので、戸棚の奥から案火を取出して、それに火を入れ、わきに箱を置いてボロで暖かにしてやつた。まだ一邊も便をしないが、糞し箱は取敢えず其傍らに置かれた。玄關の二疊の室は、是迄使ひ道が無いので其まゝムダに遊ばせておいたのだが、今日から猫の部屋と極つて、其の一隅に件んの案火、ベッド、糞し箱が陣取つた。二疊の室も是で成佛が出來るだらう。

燈火がついてゐる內はミイ〳〵鳴いては二疊をあつち此方と馳けてゐたが、最後にベッドへ入れてやつて、境ひの唐紙を〆め切つて燈火を消した時には、もう鳴きくたびれてか、おとなしくベッドの中に丸くなつてスヤ〳〵と寢て了つた。

夜があける。人間が起きる。話し聲が聞こえる。と直ぐ眼をさまして鳴く。牛乳を買つて來て呑ませると、嬉しがつてピチャ〳〵と今度は皿から舐める。漸く小便を催ほす。不思議なもので、糞し箱を宛てがふと、其砂を手で掻いてしやがむ。

昨日から名の問題が未だ決定せずにある。何といふ名をつけてやらうか。同じくは善い名をつけて此の子の前途をも祝福してやりたし、又われ〳〵の物數奇心おもちや心をも滿足させたい。

どうも妙案が無い。堺家では亡き其の長子、不二彥君を紀念せんとて『ふじ』とつけたさうだ。由分社時代の猫では有名な『なつめ』といふのがある。何といふ名にしやうかなあ。

どうしても出ない。仕方が無いから、まぐれ當りの名をつけやう。當日の新聞を持つて來る。ボクが鉛筆で假名文字を突くから、それで突いた字を名にしやうね。とやつて見る。『つゆ』。人間の名みたいだ。そんならあたしがと再びやつて見る。『てる』。益々人間だ。三度四度更にやつて見る。『がに』。田舍では蟹の事を濁つて『がに』といふが餘り滑稽でだめだ。次に出たのは『はに』。『家庭の友』の記者羽仁もと子さんの姓と同じでは人間樣に失禮だ。次は『のも』意味が無い矢張り不可ぬ。仕方が無い今度はローマ字で突いて見やうK-O-D-I-Y

何だ、可笑しい、比翼連理とでも云ふ事かと笑つて見たが一向つまらない。どうも止むを得ない。やつぱり最初に出た『つゆ』にしやう。時は丁度梅雨(つゆ)、貰つた時を紀念するのに好いかも知れない。やさしき子猫よ『つゆ』子よ、決して露と散るな、雄々しく育て。つゆ子！やさしい名では無いか。

つゆ子よ、長しへに我家の露となつて生々たる夏草に趣きを添へよかし。

○身の上の相談

本號以下この欄を設けて讀者諸君の御相談に應じます。

諸君もし思ひ餘る事、悲しき事のあるあらば、願はくば其を打明けて、記者の小さき助言をもお容れ下さる樣致したいものであります。

○喜劇 貧民長家（下）

堺利彦譯述

家庭雜誌も本號以下大いに其體裁を改め、新裝麗はしく諸君に見えると云ふのに、何時まで此『貧民長家』の舊衣の裾を引ずるのも、心なき業の樣な氣がするので、茲に話の荒筋だけチョッピリ書いて、それで御免を蒙る事にする。

▲二幕目（つゝき）

寺内は房子に會つて、結婚後自分の收入だけで質素に暮さねばならぬが善いかと問ふ。房子は、父から少からぬ金を貰ふ筈だから、そんな御心配に及ばぬと云ふ。寺内は、そんな金は斷じて貰はぬと云ふ。房子は大いに怒つて、そんな云ひかゝりを為さる程なら、此約束は私の方から破りますと云つて引込んでしまふ。

跡に平沼が歸つて來て、寺内さん貴君はまだ若い、そんな事を云つたッて家賃を取らずに家を貸す譯に行くものではなし。又そんなに立派な家を建てゝ貧乏人に住はせたとて却つて爲になりません、何も私が長家を持つて居るのに不思議はない、貴君だつて考へて御覧なさい、何の收入で食つて居るのですと云ふ。寺内は大威張で、私はそんな貧民長家の家賃なんぞで食つて居るのぢやない、私の收入は正當な地代ですと云ふ。處が其の寺内の所有の地所といふのは丁度其の貧民長家の敷地であつたので、平沼は其事を話して、寺内の收入も矢張り貧民長家の家賃の一部分

である事を示す。寺内大いに當惑する。平沼は更に、是が世の中の有様だから仕方がないと說諭する。寺内は成程尤もと感心して、硝子の家に住む者は石を投げる權利がないと云ふが、私は是まで自分で硝子の家に住んで居る事を知らなかッたと嘆息する。平沼は更に、是も人口過剩の結果で致方がないなど丶尤もらしい事を云ふ。

是で寺内の氣は打れたが、房子の怒は矢張り解ず、あんな馬鹿な男は厭だといふので、緣談は一時遂に其儘になる。

▲三幕目

利光は平沼を追出されたが、家賃取立に研いた腕で、地所の賣買の世話か何かして急に金持になつた。そして或日平沼を尋ねて來た。平沼は最初餘り相手にしなかつたが、金もうけの相談に來たと聞いて急に熱心になる。

金もうけと云ふのは、例の貧民長家が市區改正の爲に取拂となる筈で、土地も家屋も市に買上げられるのだが、今の中、長家を改築して置けば隨分高く賣り付けられると云ふのである。それには地主たる寺内を說きつけて置く必要があると云ふので、直ぐに寺内を呼びにやる。寺内がやつて來る。利益の爲にはドンナに仲の惡くなつた者でも直ぐ又一緒になる。

然し寺内には兎かく僞善な事を云つて聞かせなくては滿足しないので、利光は博愛慈善の爲にあの長家を改築して模範長家を作らうと云ふ。そして同時に實は金もうけにもなるのだと話して聞かせる。寺内も稍や心を動かしたが、金もうけの爲に慈善をするのは宜しくないと云ひだした。それから又、何にせよ、それに就ては先の話の通り寺内と房子と結婚すると大變都合が善いと云ふ話になる。寺内は大いに怒る。利害の爲に結婚するなど丶は怪しからぬと云ふのである。

處が其時、寺内は別室に於て偶然房子に會ふ。房子は此前の寺内の無法を責めて、大いに怒つて居るかと思ふと、又しなだれかゝる樣な貌をする。寺内も餘り惡い心地はせぬ。房子は猶ほ色々と寺内にじやれつく。寺内は六かしい顏をして居ながら段々に心がとろける。

そこに利光と平沼とがやつて來る。寺内は急に意を決して、市の賠償の如何に係はらず、私は貧民の爲に模範長家を作る事に斷然贊成しますと云ふ。めでたし〲で幕になる。隨分皮肉な作だ。

RŌMAJI.

どうも困つたものだ、Sekkaku 骨を折つて書いても Katei-Zasshi の Rōmaji Ran は中々讀んでくれる hito ga nai.

前の號などにも大分面白い事を載せて置いたのだけれど yonde kurenai kara nannimo narauai.

Sokode 記者は苦しまぎれに此う云ふ事を考へ出した、日本文字の中へ Rōmaji を交ぜておいて、厭でも應でも讀ませるのだ、何の事は無い、苦がい藥を厭がる小供に飲ませる爲め、周圍へ砂糖を nutte yaru no to onaji koto である。

諸君、Rōmaji を厭がつてゐる内は Sono Gammei Korō Byō wa naoranai yo!

いくら厭でも嫌ひでも Rōmaji は習はぬ譯に yukanai, 讀まずには居られぬ、Mā, sonnani 嫌はずに yatte mitamae! 面白味もあるものだ。

一つ又面白い話を kakō ka?

* * *

Aru hito ga "山高きが yue ni 貴からず" to itta ra, sono waki ni ita hito ga "soreja hikukere ba tattoin da na."

* * *

傳染病豫防のために村役場から持つて來た Sekitan-*san* を見て、年老つた百姓: "Nan da arigataku mo nai, Sekitan-*san* da nante hito o bakani shite iru, Sekitan-*don* de takusan da!"

* * *

"Kimi wa dare dai?" と聞いたら "Ore ka? Ore wa Boku sa!" と答へた人があつた。

* * *

Inakamono, 博覽會の門で守衛に向ひ "Ueno 'te yu tokoro wa doko de gowasu bē?"

Amerika de hakko-sareru Shakai-shugi Fujin Zasshi no koto wa "Henshūkyoku yori" ni kaki-mashita ga kuwashiku wa tsugi no kōkoku o mite kudasai.

○となりの厠　和尚樓

朝起きる。雨戸を開けるに蜘蛛の巣の様な細い雨、手水鉢の南天に掛かりて障子は未だくらし。目やに摩り／＼こうかに這入る。うちの厠は長屋作りの、隣りのとは脊中合せなり。跨ぐ、小便をして了ふ。トタンに戸の開く音がする。オヤツ誰か這入つて來たのかと思ふと、それは隣りのであつた。又一つ戸が開く。こいつ大便だな、ゴト／＼と何だか音をさせてゐる。汽車の發する時は蒸氣をピストンから噴き出すやうな響がする。ハヽア隣りの妻君だわい。何故か大分力を入れてゐるらしい。スポツと玩具のコルク銃の様な音、續いて遠くで機關砲を聞く様な連發の勢ひ凄まじく、再びいきむ様子、大分難産と見える。

バリ／＼と紙を裂く音が聞こえるゴシ／＼と揉むのも聞こえる。淺草紙か乃至は障子紙か。やがて又戸があく。締まる。咳拂ひ一つしながらドタ／＼と亂暴に戸を閉てゝ行く。手を洗ひながら良人と何か話してゐるがモウ其聲は聞き取れぬ。

氣がつく。あゝ自分もウンコをする筈だつたのにと、急いでいきむ。が、もう時機を逸して了つた。[illegible]張り出ぬ。えゝ糞忌々しい。

○編輯局より　深尾生

◎編輯不出來のお詫　どうも今度の編輯のマズイ事はお話しにならないが、どうも詮方ない、家庭雜誌社から平民書房の手に發行權の移る事になつたのが先月の十八九日頃で、平民書房の編輯局でこの編輯に取掛つたのがそれからなので、而も〆切は遲くも廿四五日迄にしなければ一日の發行がおくれると云ふ大さわぎ。據ろなく何も彼もムチヤクチヤに急いで漸く出來上つたものが御覽の通りの品物。それも舊來の寄書家諸君が特に御助け下されたので其のお蔭で出來たものです。來月からはモ少し用意して掛りますから、讀者諸君に於かれても惡しからず御ゆろしを願ひたい。

◎大杉榮氏　本誌の前編輯者たりし大杉榮氏は、新聞條例違犯の廉にて先月入獄されましたが、其あとでモ一つの同樣な事件の爲め又々輕禁錮四月罰金五十圓の宣告を受けられました。まことにお氣の毒に堪へません。然し獄内では至極元氣でゐらつしやる由。其のお留守宅は元の通り府下淀橋町柏木三四二で、夫人保子氏が淋しく暮らして居られます。家庭雜誌は同夫人の長くはぐゝみ育てし愛子でありましたが、今は其の愛子にも離れて嘸心淋しく思はれるであらうと思ひます。同情ある諸君の書信が其の淋しき家を見舞つたなら必ず喜んで受取られるでありませう。

◎上司小劍氏　次號には何か面白いものを書いて下さいます。

◎英文の婦人雜誌　本誌の特別寄書家として諸君のお馴染な米國の金子喜一氏の夫人ジヨセフイン、コンガー氏が主筆で今回社會主義的の婦人雜誌を發行せられました。代價は一年七十錢、申込所は米國シカゴ市五十五番街六一九です。

◎支那文の婦人雜誌　何震といふ進歩思想の支那婦人によりて先月第一號を發行せられました。女子復權會といふ會の機關なので其會則などは隨分激烈なものです。代價は一册十錢、申込所は東京牛込區新小川町二の八何氏方。

○新刊紹介

▲主婦の修養　嘉悅孝子、津川海村の兩教育家の合著、內容は多く始めて家を持ちたる若き妻君及び今後家を持つべき娘の爲に親切なる忠告を與へたるものなるが、間々姑や老いたる主婦の爲にも書かれたる節あり。「高き理想に低き生活」と云ふ工合のものより「襟垢のついた衣服」「下女のよしあし」「女子と文學思想」「空氣と日光と衞生と」といふ風なるものまであり。兎に角、婦人諸君には一讀して貰ひたき本なり。四六クロース製、二四六頁、價　十五錢、平民書房發行。

▲明治名著集　博文館創業二十週年を紀念せんとて雜誌「太陽」の臨時增刊として發行したるものなり。紙數五百餘頁の大册に、明治文明の源泉たりし名著を輯めたるものにして過ぎし日の日本を味はうには極めて適當なり。左に本文の目錄を紹介す。（並製六十錢、特製九十錢、博文館發行）

△學問のすゝめ（福澤諭吉）△百一新論（西周）△日本經濟論（田口卯吉）△人權新說（加藤弘之）△民約譯解（中江篤介）△王法論（島尾小彌太）△倫理新說（井上哲次郎）△天賦人權論（馬場辰猪）△文明東漸史（藤田茂吉）△救荒植物集說（伊藤圭介）△小說神髓（坪內雄藏）△社會改良と耶蘇敎との關係（外山正一）△日本道德論（西村茂樹）△新日本の青年（德富猪一郞）△漢學不可廢論（中村正直）△思想を管理する要を講ず（同人）

▲新公論（六月一日）　△現時代の側面觀（佐治實然）△暗黑社會の暗黑面（二葉）△個人の私德より見たる元勳（暮村隱士）、「文藝」の欄には△逗子の浪切不動（湫龍子）、「萬報一覽」は△樂天的處世の秘訣（玉理喜造）△不良少年の出づる家庭（本間俊平）△文明婦人の惡傾向（ラビッﾄ、レビュー）△日本人の表情不足（新渡戶稻造）△結核と男女の年齡（佐々木多聞）△結婚不滿足（山脇房子）等あり。發行所は本鄉東片町百十一、

▲婦女新聞（六月廿四日）　主なる記事△輕卒なる結婚（社說）△姑に對する嫁の注文（募集投稿）△健康顧問（糸左近）發行所牛込東五軒町四十一。每週月曜。

▲教育新聞（六月五日）　△教員氣質（漫畫など面白し、「小圖書館」といふ欄には一寸趣味ある切拔を載せたり。發賣所は東京神田博報堂。月二回。

▲孤兒　京都孤兒院の機關として新たに生れ出でたる少年雜誌。中々立派なもの也。月一回十五日發行。十二錢。東京本鄉千駄木林町百六十東都孤兒院編輯部發行。

▲探檢世界（三の四）　月一回、成功雜誌社

▲實業指針（二の五）　月一回、帝國實業學會

▲太平洋（六の十二）　月二回、博文館

▲農業園（一の十）　月一回、實業奬勵會

○いろ〳〵の出來事

●婦人記者倶樂部　去月十五日午後二時、芝公園に開かれありたる婦人博覽會の一室を借り受けて其の例月

會を開きたり。會するもの各新聞雜誌記者等三十三名（內婦人七名）にて、中々の盛況なりき。當日談話の主題は『婦人が獨立して職業に就くの可否如何、若し可とすれば其職業の種類如何』といふのにて、彼の月刊『世界婦人』の福田英子女史と共に出席したる神川松子女史の議論大に人目を惹けり。會の終りには例の如く晩餐あり、日暮に及て散會せり。

●恐ろしき尼　三重縣北牟婁郡九鬼村松巖寺の尼なる正木良念（十九）は去月十八日金澤市の犀川鐵橋附近にて、其の生みたるばかりの女兒を生きながら用水に投棄せし事判明し、警察に引かる。

●女學生の自殺　富山縣立富山高等女學校一年生武林園子（十六）は、同縣上新川郡熊野村の小學校教員奥井作次郎と通じたる結果、姙娠し、去月十一日神通川に入水自殺せり。

●幼女を强姦す　香川縣本田郡西植田村上見久平（十九）は、其の主家なる熊野由藏の長女梅野（三つ）を强姦せんとして陰部に重傷を負はせ、去る十四日告訴せらる。梅野は赤十字病院に入れたれど生命危ふしと。

●茶碗と生命　去る十六日午前七時頃、日本橋區濱町一丁目一番地の隅田川河岸へ小娘の屍體漂着したるが是は同區坂本町三十一魚屋高橋お文の養女おえつ（十四）といふ者にて、其の前日、つひ茶碗を破りて、お文の爲に散々小言を言はれしを口惜しがり、其まゝ家出して濱町より投身したるなりと。

●夏の七草　蓮と桔梗とは未だ早けれど、夏の七草は東京近郊の發育良好にて、縞薄、夏菊、仙翁花、女郎花、小車草等は既に花屋の店頭に現はれ、其他にも、夏萩、夏芒、矢羽根芒、紫陽花、男郎花、月見草、柳草、浦島草、鋸草、金魚草、雁皮草、檀特草、何れも五六分の盛りなり。

●女子教育講演會　女學雜誌『女鑑』編輯局の催ほしに係る同會第一回講演會は、去二十二日午後二時より開會。坪井博士の『諸人種男女の分業』和田垣博士の『折に觸れたる感想』、井上博士の『日本女子の將來』、及び餘興として唱歌、琴曲、一絃琴等あり、非常の盛會にて午後六時半頃散會したり。參觀者の八分までは女學生なりしも、中には丸髷の婦人や女中體の姿をも認しは喜ぶべき現象也

●三輪田勢以子氏死去　三輪田高等女學校教頭三輪田元道氏の夫人勢以子（二十七）は肋膜炎にて去月八日死去したり。臨終の前一時間、母眞佐子刀自及び良人に後の事ども言ひ遺し、さて靜かにヴワイオリンを抱きあげたれど力なく、幽に美妙の哀音を殘して其まゝ息を引取りしとか。

本誌の發展

季は漸く酷暑に向ひて人は惰氣滿身ならんとす然れども今**新裝**を以て諸君に見えたる本誌は本月を以て**發展の門口**に立てり本號以下月を重ねて如何に本誌が改良進歩を遂ぐべきかは乞ふ之を今後の紙上に徵せよ若し夫**秋風吹到**りて衣袂膚に宜しきの候來らば**更に**一段の刷新と改良とを加へんと欲す**待**てよ諸君、一兩月後の本誌は**文**として親切ならざるは無く**教訓**として宜しからざるは無く**趣味**として清新ならざるは無く一たび之を手にすれば又た釋つるに忍びざるものたらしむべし**見よ**本號に於ても既に**紙數**十六頁を**增**したるに拘はらず**代價**は依然として**舊**の如し今後の家庭雜誌は實に勉强と奮發とを以て只管諸君の好伴侶たらんとする者也

本誌の發展

小生の『旅行』は最初二ヶ月位の筈の處、意外にも六ヶ月ばかりに長引く事と相成り、斯くては到底本誌經營の務を果す事も出來ませぬので、平民書房主人熊谷千代三郎君と相談の上、本號以下、同君の手に引繼ぐ事に致しました。事情宜しく御推察を乞ふ。最後に諸君多年の厚意と同情とを謝す。

大杉榮

家庭雜誌讀者諸君

前記の如く大杉君旅行の爲め、其後をば小生が引受ける事となりました小生も今までは唯單に本誌の愛讀者でありましたが、これからは特別の關係を以て長き本誌愛讀者諸君に對する事の出來るのは喜びとする處であります。どうぞ御氣づきの事あらば御遠慮なく御叱正の上、幾久しく御愛顧の程を願ひ上げます。

七月一日　熊谷千代三郎

第九號（四八）

定價	
一部	金八錢
六ヶ月前金	四十二錢
一ヶ年前金	八十錢
（何れも郵税共）	

廣告料	
特別一頁	十圓
普通一頁	七圓

▲本誌は毎月一回（一日）發行とす。

▲代價は小爲替を以てお送り下さい。郵券代用ならば五厘切手で一割增に願ひます。

▲御注文の時は必ず何巻何號より何號まで何册の前金と明瞭に御記載を願ひます。

▲御手紙には必ず住所姓名をハッキリとお書き下さい。又御轉居の際は新舊の宿所を併せて御通知を乞ふ。

▲本誌は前金でなくては一切御註文に應じませぬ。前金の切れた時には帶封に「前金切」と朱印を捺して上げますから御注意下さい。

▲歐米諸國よりの御注文は別に一册に付二錢づゝの郵税を申受けます。

明治四十年六月廿五日印刷
明治四十年七月一日發行

東京市本郷區弓町二丁目一番地
發行兼編輯人兼印刷人　熊谷勝

東京市京橋區日吉町十番地
印刷所　近藤商店

發行所　東京本郷區弓町二の一　平民書房

大賣捌所　上[illegible]　東[illegible]

平民書房新刊書

嘉悦孝子、津川海村 共著

主婦の修養

（全一册）

クロース製美本

定價金五十五錢

郵送料金六錢

女子教育家として有名なる二先生が質實に女子の心得を説けるものは本書なり一たび本書を繙くものは精神及び肉體の修養法より日常生活法の微些なる點に至るまで親切と丁寧とを極めたる有益なる**教訓**と**忠言**とを聞くことを得べし主婦讀まざるべからず、令孃讀まざるべからず、舅姑讀まざるべからず、青年男子亦讀まざるべからず

●堺利彦君序
●幸德秋水君序

米國社會黨新聞記者 金子喜一著

（全一册）

海外より見たる社會問題

定價金四十錢

郵送料金四錢

著者は北米シカゴの日刊社會黨新聞の記者にして又同地社會黨の一會員なり**忌憚**なき論評**犀利**なる觀察**明快**なる論斷**日米兩國**の社會問題は收めて此の一卷に在り**讀め**諸君、本書を讀まずして誰か北米の日本人排斥を云

本書を見ずして誰か日本の社會問題を解かんとはす

東京市本郷區弓町二丁目 平民書房

平民書房新刊書

持原皿山
桂木伴水 共著

（定價卅五錢
郵稅四錢）

弱者

强い者は食ひ弱い者は皆**食はれ**ます血も骨も肉も筋も皆な惨たらしう食はれても弱者は未だ我慢が出來るでせうか、泣き叫ぶ腸をえぐる様な悲しい聲を聞きつゝ强者はいつまでも之に堪へ得るでせうか强者弱者、いづれにもせよ本書に就いて學ぶ所がなくてはなりませぬ。

●**恠物傳**は『明治闇黒史』の筆者として有名なる有磯逸郎氏が其獨特の**怪筆**を揮つて文明の今日世の中に蔓つて居る**闇中の恠物**を忌憚なく描き出したるものでありますその**奇警なる觀察**と雄勁なる筆力とは直ちに以て**百鬼晝行**の**偉觀**を紙上に躍如たらしめて居ます。日本の魑魅魍魎のどんなものかを知つて化されぬ要心も肝要でせう

恠物傳

有磯逸郎著（全一册）

定價金三十五錢

送料金四錢

東京市本郷區弓町二丁目一 平民書房

製造元

花島煉乳場

伊豆國三島町

○各位の家庭の花の一層美はしからんが爲に



○遠來の輸入品よりも新鮮なる內地製煉乳を薦む

發賣元

逸見山陽堂

東京日本橋區大傳馬町一丁目

（電話浪花二一五番）

家庭雜誌第五卷第九號　明治三十六年四月五日第三種郵便物認可　明治四十年七月一日發行

